日曜學校教案

加藤直士著

東京
警醒社書店

264
001

特18
748

日曜學校教案

はしがき

一此教案の上卷（前半期分）のはしがきに詳しく述べて置きました通り、本書は萬國日曜學校協會の教科書委員の手に成つた新編『級別萬國教科書』の少年少女科第一學年教師用の教科書を土臺にして、之に編者自身の實驗から來た考へを附加して、成るべく日本の兒童にわかり易い樣に日本化したものであります。

一上卷は六月の第四日曜で終つてをりますので、此下卷は七月の第一日曜から初まつて十二月のクリスマスの前の日曜日に終ることになつてをります。クリスマスの日曜日は何處の日曜學校でも祝祭の準備や演奏の練習などで忙がしく、普通の學課を教授することは困難でありますから、此日の學課はわざと除いて教師の任意といたしました。此教案が全體で五十一課より無いのは其爲めであります。

日曜學校少年少女科教案（後半期）

目次

第廿七課　ホレブ山の燃ゆる棘……（七月第一日曜）……一頁
第廿八課　モーゼとアロン、パロ王の前に出づ（七月第二日曜）…六
第廿九課　逾越の夜……（七月第三日曜）……一一
第三十課　イスラエル軍紅海を渉る…（七月第四日曜）……一五
第三十一課　荒野のマナ……（七月第五日曜）……一九
第三十二課　律法を與へらる……（八月第一日曜）……二三
第三十三課　荒野に於ける幕屋……（八月第二日曜）……二七
第三十四課　ナハブとアビフの暴行……（八月第三日曜）……三一

はしがき

一上卷の百二十二頁に誠に申譯の無い間違ひがあることを發見致しました。それはパロの娘にモーゼの乳母を世話した婦はモーゼの姉であるのに、どうした譯か誤つて伯母としたことであります。茲に謹んで訂正致します。

一智識も經驗も足りない編者の手になつた此教案が、意外にも全國の日曜學校に多く使用せられて居ることを見まして、此下卷を出すにも大に骨折甲斐のある心地が致します。何卒教案使用者たる多くの教師諸兄姉が本書の缺點又は遺漏について御氣附きの點があらば、再版の時の爲めに編者に御教示下さるやう御願ひ申します。『凡そ我を信ずる小子の一人を礙かする者は其首に磨石を懸けられて海に投入られん方その人の爲になほ善かるべし』。げに兒童の宗教教育ほど嚴肅なるものはありません。編者は此教案を完成する爲めに如何なる增補訂正の勞をも惜まない者であります。

明治四十四年四月中旬

加藤直士誌

目次

第三十五課　間者の報告……（八月第四日曜）……三五
第三十六課　荒野に於ける困難……（九月第一日曜）……三九
第三十七課　モーゼの死……（九月第二日曜）……四四
第三十八課　復習……（九月第三日曜）……四八
第三十九課　種播きの比喩……（九月第四日曜）……五三
第四十課　善きサマリヤ人……（十月第一日曜）……五七
第四十一課　放蕩息子の比喩……（十月第二日曜）……六二
第四十二課　小事に忠なれ……（十月第三日曜）……六九
第四十三課　二つの礎……（十月第四日曜）……七三
第四十四課　賢き童女と愚なる童女……（十月第五日曜）……七八
第四十五課　謙遜の實例……（十一月第一日曜）……八三
第四十六課　死後の賞罰……（十一月第二日曜）……八七
第四十七課　愚かなる富める者……（十一月第三日曜）……九一

第四十八課　高ぶる者は卑くせらる……（十一月第四日曜）……九五
第四十九課　人の罪を免さぬ惡人……（十二月第一日曜）……九九
第五十課　葡萄園の働人……（十二月第二日曜）……一〇三
第五十一課　復習……（十二月第三日曜）……一〇八

日曜學校教案　下卷

少年少女科教案　（自七月至十二月半年間分）

第二十七課

【課題】ホレブ山の燃ゆる棘。

【教材】出埃及記第三章十六節より二十五節まで。同三章一節より十四節迄。同四章十節より二十節まで。

【朗讀】出埃及記三の一―六。同四の一〇―一二。

【金言】我れ汝を敎へ汝を歩むべき途に導きわが目を汝に注めてさとさん（詩一三二の八）。

【引照】ヨブ記一二の一三。箴言二の六、七、八。哥前一二の四―一一。雅各一

の五。

〔教訓〕　能はざる所なく知らざる所なき天の父は我等人間の求めに應じて凡ての無くてならぬ智慧と能力とを授け給ひ、われらに歩むべき途と爲すべき業とを知らしめ、且つ之を成就するに足るの力量を與へ給ふことを、生徒に知らしむるを以て此學課の目的とす。

〔教話〕　諸君、前の日曜日から私共は舊約全書の何と云ふ書物の勉強を始めましたか。左樣出埃及記と云ふ書物です。出埃及記とはイスラエル人が永い間住んでゐたエヂプトの國を出でゝ本國のカナンに歸らうとした事を書いた書物であります。そこで誰れがイスラエル人をエヂプトから導き出しましたかと云ふに、それはモーゼと云ふ偉い御方が大將軍となつて何十萬人の同胞を救ひ出したのであります。併しかういふ偉いモーゼも初めから偉い人物ではありませんでした。神樣は誰れでも偉い人間にするには種々な學校に入れて修業をさせなさいます。創世紀の終りのお話のヨセフがあゝいふ偉い人になる迄には先づ埃及に

奴隷に賣られたり無實の罪で牢屋に入れられたりして容易ならぬ患難辛苦の間に能く忍耐して終にはエヂプトの大宰相にまでなつたのであります。ヨセフの學校は諸君の毎日上がつてゐる小學校の樣な學校ではなく、奴隷の仕事場や牢屋の中でありました。日本の諺にも艱難汝を玉にすと云ふことがあります。私共は辛い目にあつたり厭やな仕事をしたりする間に段々に玉の樣に磨かれるのであります。故に決して失望してはなりません。偖てモーゼもヨセフと同樣種々な學校に入つて修業をいたしました。第一パロ王の宮殿に育てられてゐる間に、これは本當の學校に入つて埃及の諸々の學問を修めました。それからイスラエル人を救はうと思つて埃及の王樣に憎まれ、ミデアンの國に遁げて行つて永い間牧羊者になつて野山をかけまはつたりしてゐました。モーゼは幼時からパロの女に拾はれて宮殿の中に生長したのですが、宮殿の中で育つた人は學問などは能く出來ても、身體が充分に煆はれませんから何十萬のイスラエル人を率いて本國に導き出すやうな大將軍の仕事には不適當であります。そこで神樣は野

山の牧場と云ふ不思議な大學校に入れてモーゼに今一修業をさせ給ふたのであります。

或時モーゼが羊の群をひいて曠野の奥に深入りをして、神の山と稱へられたホレブ山と云ふ處に參りましたが、神樣が燃える棘の焔の中に現はれてモーゼに物言ひ給ひました。固より神樣は目に見える御方ではありませんが、モーゼの心の中に火の燃ゆるやうに明かに神樣の御顏が耀やいて見えたのでありませう。エホバの神樣は燃ゆる棘の中から『モーゼよモーゼよ』と呼び給ひました。モーゼは『我こゝに在り』と答へました。神樣は『汝の今立てる此山は聖き地なれば汝の足より履を脱げ、われは最も大切なる役目を今汝に授けん』と仰せられました。モーゼは非常に畏れて其面をかくして地にひれ俯したとあります。神樣は尙ほもモーゼに向つて、我は汝の先祖達なるアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である、今我れ彼等の子孫たる汝等イスラエル人が、埃及に於て苦しんでをる有樣を見て之を本國に導き出さうと思ふが、之を率いて安全に

導き出すところの大將軍の役目を汝に授けると仰せられました。モーゼは此神の命令を聞きまして喫驚いたしました。私のやうなつまらない人間がどうして其樣な大役を勤めることが出來ませう。殊に私は辯舌が非常に下手ですから甘くパロ王と談判をして無事にイスラエル人を埃及から導き出すことは出來ません。どうぞ此役目だけは他の人に御命じ下さいといつて頻りに辭退いたしました。その時神樣はモーゼに向つて其樣な事は少しも心配するに及ばぬ、我エホバ汝の口の中にあつて汝の言ふべきことを敎へてやるから、大丈夫であると保證し給ひました。モーゼは此神樣の約束を信じて勇氣を以て立ちました。凡ての智慧も力も神を信ずる者には與へられるものであります。今日の金言は能く其事を私共に敎へてをる言であります。小學校でも中學校でも大學校でも、又此の世の中の種々な學校（前に云へる如き）でも、神を信じて能く忍耐して勉强する者には必ず優等の成績を與へられると極まつてをります。

第二十八課

【課題】　モーゼとアロン、パロ王の前に出づ。

【教材】　出埃及記四の二七より六の一まで。六の二八より九の三五まで。

【朗讀】　出埃及記四の二七より五の四まで。七の一より五まで。

【金言】　惡しき者は悲み多かれどエホバに依頼むものは憐憫にてかこまれん（詩三二の一〇）。

【引照】　詩七八の四二―四九。一〇五の二六―三五。箴一の二四―三一。コロサイ書三の二五。

【教訓】　惡しと知りつゝ故意に義しき事に從はず神の命に背く者の必ず受くべき刑罰の如何に恐るべきかを知らしめ、同時に神が自らの命に背く者に對してすら有し給ふ忍耐と寬容の如何に大なるかを知らしむるを以て此學課の目的とす。

【教話】　モーゼが神様の御命令を受けた時に自分は辯舌が惡いからと云つて頻りに辭退いたしましたが、神様はモーゼに必ず其場合に言ふべき事を示してやると云ふ約束をなさいまして、尙其上にモーゼに代つて談判をする爲めに彼れの兄のアロンと云ふ人を相談相手として選び給ひましたからモーゼは非常に勇氣を得まして愈よイスラエル人をエヂプトから導き出すことに力を盡さうと決心を致しました。そこでモーゼとアロンの二人は先づエヂプトに居る同胞イスラエル人の長老たちを皆な集めて、神様の思召を言ひ聞かせましたが民の長老は彼等の言を信じてエホバの神を拜しました。此時からモーゼは愈よイスラエル人の大將アロンは副大將となつたのであります。

二人は埃及王パロに面謁して、イスラエルの神エホバの仰せであるから、イスラエルの民を早速埃及の地より去らしめて、遠國に於て自由にエホバを拜むことの出來るやうにして下さいと云ふ談判を試みました。ところがパロ王は埃及の神々である偶像は知つて居るけれど、イスラエル人の拜んでゐるエホバの

神の事を知りませんので、少しもモーゼとアロンの申す事に耳を傾けませんでした。パロ王は埃及の國からイスラエル人が去つてしまへば多くの奴隷を失ふことになるのですから、モーゼやアロンの談判を聞いて非常に怒りました。イスラエル人がこの樣な事を申して來るのは、多分彼等の仕事が餘り閑散であり過ぎるので餘計な望みを起したのであらうと考へまして、パロ王は愈よ益すイスラエルの民を虐待して、今迄での勞役よりもズツト難儀な勞役を之に言ひつけました。即ち瓦をやくのに今迄では薪木や藁を王樣から下げたのですが、今度は自分で薪木や藁を刈り集めて同じ分量の瓦を製造せよと云ふ嚴命を發しました。併しエホバはイスラエルの民に約束せられ後日必ず目的を達して自由の國カナンの地に歸り、新しき國をそこに興すやうに導き給ふことを告げて常に之を慰め給ひました。

それでモーゼは少しも失望せず度々パロ王の前に出でゝ同じ談判を試みました。其度毎に二人はパロ王の前で色々不思議な奇蹟を行ひましてエホバの神の

力を之に示しました。又エホバは埃及王をして自分の落度を覺らしめる爲に種々なる災難を埃及の國内に起しました。第一はエヂプト中の川の水が血に變つたこと、第二は埃及中に澤山の蛙を出して人や獸を苦しめたこと、第三は埃及中の塵をかへて蚤となして全國を惱ましました事、第四は國中一杯に蚋を生じて人畜を刺さしめた事、第五は埃及中の家畜を疫病で皆な死なしめた事、第六は國内の人民に恐ろしい腫物を生せしめた事、而して第七には國内に大きな雹を降らしめた事などであります。此災難が起る毎にパロ王は恐れて必ずイスラエル人を去らしめると云ふ約束をモーゼとアロンに致しましたが、其災難がエホバによつて取去られると、直ぐに前の約束を破つて少しも民を去らしめません。これは日本のいろは歌留多にもある喉元過ぐれば熱さを忘れる類であります。エホバはパロ王が愈よ其罪を悔いて約束を實行する日を忍耐して待ち給ひましたが、パロはエホバを侮つて其命に從ひませんので、段々非常に大なる災難を埃及中に起して其悔い改めを促がし給ひました。之に反してイスラエル人

第二十八課　モーゼとアロン、パロ王の前に出づ

は少しも此災難にあひませんでした。今日の金言は何でありますか、其中の惡しき者とは誰れの事に當りますか、又其中のエホバに倚頼むものとは誰れの事に當りますか。

第二十九課

〔課題〕　逾越の夜。

〔教材〕　出埃及記第十章一節より十二章卅六節迄。

〔朗讀〕　出埃及記第十二章廿九節より三十六節迄。

〔金言〕　わが力わが歌はエホバなり、彼は我が救拯となりたまへり。彼は我神なり我これを頌美へん（出一五の二）。

〔引照〕　使七の六、七。哥前五の六—八。詩一〇五の三四—三八。

〔教訓〕　神は人の過誤や罪惡に向つて數次種々なる警戒を與へ給ふ、其狀恰かも是れでもまだ醒めぬか〳〵と搖り起して目を覺まさんとするが如し。人もし此警戒を顧みず己が罪過を悔改めずば神は終に非常なる災難を其の身の上に降して其人を罰し給ふべし。故に神の忍耐に恃れて禍を招かざるやう速かに神の命に服從するの必要を、よく〳〵生徒に理會せしむるを以て此學課の

目的とす。

〔敎話〕前の日曜日に私共は、パロ王がイスラエルの民を埃及から去らしめないので、エホバは七ツの災難を埃及國内に降された話を學びました。(七種の災難は何々なりしかを問ふべし) 然るに頑固なるパロ王は少しもイスラエル人を去らしめる約束を實行しませんので、今度は第八番目の災難として非常に澤山の蝗を生じて國内の穀物野菜を悉く食い盡させました。(熱帶國には今でも度々蝗の大軍が全國を荒らして仕舞ふことがあります、其時太陽の光も蝗の雲で掩はれて日蝕の樣になると申します)。これでも尙ほパロ王は從ひませんので今度は第九番目に三日の間暗黑を國内に起しました。埃及人は闇の中に手探りをして身動きをした位で有ました。パロ王は怖れてイスラエル人の男女を皆な去らしめるけれども只だ家畜丈けは置いて行けと申しましたが、モーゼは之を拒絶しました。第十番目の災難は是迄の九ツの出來事に比べて愈よ絶頂に達したのであります。即ち今度は一夜のうちに埃及國内の凡ての家の長子が死んで仕舞

つたのであります。上はパロ王及び其臣下より下は磨臼ひく婢に至るまで一夜の中に其長男長女を失つて了ひました。聖書に『エヂプトに大なる號哭ありき死人あらざる家なかりければ也』と書いてあります。唯だイスラエルの家々丈けは誰一人此の不幸に出會つた者はありませんでした。其理由は神がモーゼをしてイスラエルの全家に命じて毎家各一頭の小羊を屠らしめ、其肉は炙りて食し、其血を家々の門口の兩柱と鴨居に塗らせまして、是れはイスラエルの家であると云ふ印しをなさしめられたので、其夜エホバの使が此印しのある家丈けは逾越して長子を殺すことをせなかつたからであります。エホバの使が其家を逾越して無事であつたと云ふので猶太人は此日を紀念するために今日までも逾越の節と云ふお祭を擧行してゐます。此節には小羊を屠つて其肉を食ひ、又パン種を入れずに作つた堅パンを嚙ぢり、苦い菜をお菜として食べるのであります。故に此節を一名酵いれぬパンの節期と申します。それに今一つ面白いのは此節の日には家内の人が足にわらぢを穿き手に杖を持ち腰をひきからげて立つ

たまゝに此食事をするのであります。これはイスラエル人が其日に急いで埃及から出立したのであるから之を紀念する爲に旅仕度のまゝで急いで食事をするのであります。かくして流石のパロ王も到頭閉口して全くエホバの神の命令に背いたことを悔いまして、尙此上の禍を免るゝ爲めに一時も早くイスラエル人全體に埃及の國を出て行て貰ふ樣に頼みました。埃及の民たちも金銀財寶をイスラエル人に贈りまして一時も早く出立する樣に願ひました。其時喜び勇んだイスラエルの民は多分聲を揃へて今日の日課の金言のやうな歌を歌つたのであらうと思ひます。『わが力わが歌はエホバなり、彼は我が救拯となりたまへり。彼は我神なり我これを頌美へん』。神に背くものは終に非常な禍を受けます、神に從ふものは何時でも神の惠みを讃美して暮すことが出來ます。(注意、エホバの降し給ふ災難を殘酷なる復讐的行爲の如く描き出さゞる樣にすべし。即ちエホバに背く爲に人が自ら招く禍なりと知らしむべし)。

第三十課

【課題】　イスラエル軍紅海を渉る。

【教材】　創世紀十二章三十七節より十五章二十一節まで。

【朗讀】　創世紀十四章二十一節より三十一節まで。

【金言】　信仰によりて彼等は紅海を陸の如く渉りしがエヂプトの人は之を渉らんとして溺れ死たり(希一一の二九)。

【引照】　詩七八の一二—一四。同一〇六の七—一二。哥前一〇の一、二)。

【教訓】　エホバに倚り頼み其命を奉じて萬事を行ふ者は常に安全の道を歩み、エホバの聖旨に背き義しき者を苦しむる惡人は常に危難の道を歩む。神を信ずる者は火の柱雲の柱によりて導かれ紅海の如き難塲をも無事に通過して目的の地に達するを得。故に神を信ずるの信仰は何よりの安全なる道なるを敎ふるを以て此學課の目的とす。

〔教話〕　イスラエルの民は愈よパロ王の許可を受けて、モーゼの指揮の下にエヂプトの國を出で、神の約束し給ひしカナンの國に旅立ちをすることになりました。其人數は女や子供の外に六十萬人の歩兵があつたと云ふことです。六十萬人と云へば日露戰爭の時の日本軍全體ほどあつたのですから、之を率いて諸々の敵國を通り過ぎて目的の國に到着することはモーゼに取つて容易の仕事ではありません。モーゼは軍人としても慥かに大山大將以上の大人物であつたと見へます。併しモーゼは何程偉い人でもエホバの神が夜晝イスラエルの民を導き給はなかつたならば到底曠野の旅をつゞけることは出來なかつたらうと思はれます。聖書にエホバが彼等の爲めに晝は雲の柱をもつて夜は火の柱を以て彼等を迷はない樣に導き給ふたと書いてあります。偖てパロ王は一旦イスラエル人の埃及から出で行くことを承認しました。けれども愈よ百萬人に近き奴隷を失ふことになつたのですから、是れでは自分の國の土木工事も建築事業も何もかも出來なくなると思つて、彼等を去らせた事を大に悔しく思ひました。そこで彼

はエホバの神の大なる能力を忘れてしまつて、埃及全國の兵隊を以てイスラエルの民を追ひかける事になりました。埃及の軍勢は選拔の戰車六百輛に騎兵歩兵其他の兵隊無數でありました。此大兵が後ろから追ひかけて來たのを見ましてイスラエルの民は非常に懼れてエホバに向つて泣き叫び、且つ大將モーゼに向つて「汝は何故にかゝる曠野に我等を導き出して死なしむるや」などゝ云つて不平と怨みの言葉を發しました。彼等が斯樣に懼れて泣き叫んだのも無理はありません。彼等の前には渺茫たる紅海があり彼等の右手にはエヂプト人の砦があり、彼等の左手には高山があり、さうして彼等の後ろからは大軍が押寄せてくるのでありますから、それこそ本當に進退維れ谷まると云ふ有樣でありました。其時エホバはモーゼに命じて「汝杖を擧げ手を海の上に伸べて之を分ちイスラエルの子孫をして海の中の乾ける所を往かしめよ」と仰せられましたので、モーゼは其通りに紅海の上に手を伸べて祈りました。すると其時から終夜強い東風が吹き起りまして、其風の力で海の波が一方に吹き寄せられて、水が

二つに分れて其中を通ることが出來る樣になつたのであります。何ご不思議な事ではありませんか。尤も此紅海と云ふのは今のスエズの運河の邊の最も海の幅の狹い所であるさうですから、潮と風の加減で時々海の水が非常に引いて淺瀨になることがあると云ふことですが、此時のも或はそんな譯であつたのかも知れません。それは兎も角イスラエルの民は無事に海を渉つて向ふの岸に上陸しましたけれども、埃及の軍勢が同じく海を渉りかけた時には、浪が逆卷いて來て一人も殘らず溺れ死んでしまひました。諸君今日の金言は即ち其事を云つたのです。(我邦にも弘安五年元寇の役に於て神風起り敵軍を全滅せる歷史あり好對照として語るも可)。

第三十一課

〔課題〕荒野のマナ。

〔教材〕出埃及記第十五章二十二節より第十六章三十六節まで。

〔朗讀〕出十六の一一—二三。

〔金言〕我儕の先祖野にてマナを食へり錄して天よりパンを彼等に賜へて食はしむと有るが如し(約六の三一)。

〔引照〕詩七八の一五—二九。太六の二五六。約六の二九—三五。

〔教訓〕イスラエルの民荒野にて飢えし時天よりのパンを以て養はれし如く、天の父は我等の凡て無くてならぬものを知りて之を與へ給へば、吾等は皆感謝と滿足を以て之を受け、決して不平不滿の念を起すべからざるを生徒に教ふるを以て此學課の目的とす。

〔教話〕イスラエルの民は無事に紅海を渡り埃及王の虎口を遁れて、愈よアラ

ピヤの曠野を通つて目指すカナンの國に大旅行を企てたのであります。此旅行は數十萬の人民を率ひて人も住まない野原をさまよひつゝ行くのでありますから、其困難の多いことは到底お話しになりません。第一の困難はアラビヤの沙漠の事ですから飲水が非常に乏しいことであります。三日の間水を飲むことが出來ないで漸やくメラと云ふ處に着いて其處にある水を飲まふとしましたが、其水は苦くて飲むことが出來ないので非常に失望致しました。其時人民はモーゼに向つて我等何を飲まんかと云つて呟やきましたが、モーゼはエホバの命に從つて或木の枝を其苦水の中に浸しましたので其水が甘くなつて飲むに適するものとなりました。是は多分或植物の成分が化學作用で水の成分に變化を起さしたのでありませう。それから進んでエリムと云ふ處に着きましたが、此處には水の井十二と棕櫚の樹七十本ありまして、誠に心地よい綠洲でありましたから其處に天幕を張つて暫らく休養ました。併し前途を急がねばならぬ旅ですから何時までも水の傍に居る譯にはゆきません。此處を立出でゝ段々シナイ山の方

に向つて進んで行き、二ヶ月目の十五日にはシンの曠野と云ふ所に着きました。此處に着いて第二に起つた困難は食物が缺乏して民皆な飢を訴ふるやうになつた事です。彼等はモーゼに向つて不平を鳴して、こんな目に遭ふ位ならば寧そ埃及に居て奴隷の苦役をしてゐた方が增しであつたに、汝は我等を導き出して荒野の中に餓死せしめるのである乎など云つて迫りました。世の中に食物の無いほど辛い事はありません。イスラエル人の此呟やきは道理であります。そこでエホバは夜に於てイスラエル人の天幕の周圍に澤山の鵜を集めて全營を覆ふばかりになさいました。又翌朝になつて見れば野原一面に小さい圓い者が霜のやうに天から降つてをりました。是はマナと名くる天よりのパンでありまして、其味は蜜を入れたる菓子のやうな非常に美味ものでありました。アラビヤの野には今でも澤山の鵜が群がつてくる事があり又一夜のうちに松露のやうな蕈の類が出ることがあります。マナは此蕈の一種であつたかどうかは判然しませんが、兎に角にイスラエルの民は皆を之を食つて其飢をいやしました。彼等は

エホバの命に從つて日曜日から木曜日迄の五日間は毎日一人につき一升程のマナを取り入れ、金曜日には其倍二升ほどを取入れました。それは安息日に休息む爲めでありました。猶太人が土曜日を安息日として守ることは此時から初つたのであります。イスラエルの民は水と食物の乏しい曠野の中にも、エホバの神が凡て其必需品を日毎に與へ給ふたによつて無事に其旅行をつゞけることが出來ました。私共も天の父なる神様に向つて「我等の日用の糧を今日も與へ給へ」と云ふ主の祈を繰り返しまして、而して之を與へられた時には「神よ今日も恙なく此食を給ふことを感謝致します」と云つて感謝して其食物を戴かねばなりません。一粒の米でも皆な神の賜物であります、美味物が無いなどゝ不平を云ふことは神の子供の決して爲すべきことではありません。感謝して食物を戴くのが信者の第一の本務であります。

第三十二課

【課題】律法を與へらる。

【教材】出埃及記第十九章第二十章。

【朗讀】出埃及記二十の一より十七迄。又は詩篇第十九篇。

【金言】エホバの法は全くして靈魂を生きかへらしめエホバの證詞は堅くして愚なるものを智からしむ（詩十九の七）。

【引照】申六の四—九。尼九の一二—二〇。詩一九。太二二の三四—四〇。羅一三の八—一〇。

【教訓】誡律を與へ給ひし神に對して無上の尊敬と絶對の服從とをさゝぐるの決心を生徒の心に鞏固ならしむるを以て此學課の目的とす。

【教話】イスラエルの人々がモーゼに導かれてエヂプトを出てから三月目に至つてシナイ山の麓の荒野に着きました。此シナイ山と云ふのはアラビヤのシナ

イ半島の南部にある高山で、下には廣き谷があり上には嶮しい岩石の高地があつて誠に奥床しい靈山であります。モーゼは民を山の前の荒野に天幕を張らせて、自分は一人シナイ山に登つて行つて其處にエホバの神を拜して其御意を伺ひました。其時エホバはモーゼに向つて、若しイスラエルの民が善く我言を聽き我命令を守るならば其民は諸々の他の民に勝つて我恩惠を受け我が聖き民として何時までも幸福を受けるであらうと仰せられました。モーゼは此神の御言を傳へる爲めに山から下つて來てイスラエルの民に之を告げましたが、イスラエルの民は皆なエホバの下し給ふ御命令を固く守ると云ふ約束を致しました。

そこでモーゼは再びシナイ山に上つて神の御前に出でましたが、此時エホバは十個條の誡律を書き付けてある石の板二枚をモーゼに造らせ給ひました。是が即ち舊約の十誡であります。皆樣は未だ年が若いですから此十誡の意味が殘らず理會ことが出來ません。それで私共は其中の六ツ丈けを學ぶことに致しませう。此六つはどんなに幼い人でも能く分かることゝ思ひますから、分らない

事は大きくなる迄後廻しにして先づ能く分かる事丈を學ぶことが大切です。モーゼの十誡の主もなるものは左の通りです。

第一、偶像を拜む勿れ。（第一、二、三誡）

第二、安息日を聖く守れ。（第四誡）

第三、汝の父母を敬へ。（第五誡）

第四、怒ること勿れ。（第六誡）

第五、僞ること勿れ。（第九誡）

第六、人の物を欲しがる勿れ。（第七、八、十誡）

●第一、神樣を信ずる者は木や石や金で造つた偶像を拜む必要はありません。日本にも種々な迷信があつて方々に偶像が祭つてあります。之を拜んではなりません。只だ昔の忠臣義士や吾等の祖先を祠つてある神社佛閣などに相當の敬禮をすることは偶像崇拜ではありませんから差支はありません。●第二、安息日を守ることは平常の日よりも一層此日を神樣の事を學ぶ爲めに用ゐることです、日

曜學校に出席するのは其一つであります。第三、父母に孝行を盡すことは日本の道德の大本であります、父母を敬ふのは何よりも神の御意に叶ふことであります。父母に不孝なることほど神に向つての大罪はありません。第四、怒ることは甚しくなれば人を殺すことになります。私共は人を殺さないでも人を怒ることがあつては神の御命令に背くのです、慎まねばなりません。第五、僞ること勿れとは子供に取つて一番大切な敎へであります。虛言は竊盜の種と申しまして虛言を吐く者は決して偉い人にも善人にもなりません。第六、人の物を欲しがるのは誠に卑しい根性であります。心の中の色々な汚れと貪慾とは皆な人の物を欲しがることから起ります。自分の持つて居る物で何時でも滿足する子供は却つて善い物を與へられるものです。世の中の惡事は大抵此慾心から生じますから子供の時から能くよく氣を附けねばなりません。以上六つの誡めを守ることが即ちモーゼの十誡を守ることであります。

第三十三課

【課題】荒野に於ける幕屋。

【敎材】出埃及記第三十五章四節より二十九節まで。同十四章十七節より三十八節まで。

【朗讀】出埃及記四〇の一七—三八。

【金言】神の家は活ける神の敎會なり眞理の柱と基なり（提前三の一五）。

【引照】詩一五篇。同九九の六—九。希九章。

【敎訓】エホバの神の敎會の起原を知らしめ兒童をして神の家の如何に神聖にして人の信仰に必要なるものなるかを悟らしむるを以て此學課の目的とす。

【敎話】諸君は何と云ふ敎會の日曜學校の生徒でありますか。あなたの敎會は何年頃建築されましたか。敎會は私共神の子供が天の父樣を禮拜する神の家でありますから私共に取つて何よりも一番大切な所であります（茲に簡單に

教會の歴史や會堂の建築に關する話を試み兒童をして自己の教會に對する興味を增さしむべし)。今日は世界中で一番古い教會の御話を致します。モーゼがイスラエルの民を率ひてシナイ山の麓に天幕を張りました時に、神はモーゼに向つて汝イスラエルの人々をして種々なる必要な建築其他の材料を捧げしめて『我が爲に聖所を造るべし我れ彼等の中に住まん』と仰せられました。而して其神の幕屋を造る樣式と其中に備へつける凡ての器具の雛形とを一々詳しくモーゼにお示しになりました。そこでモーゼはイスラエルの人々に凡て自分の心に喜んで出すものは何でも神に捧げるがよいと命じましたので、民は爭ふて金銀寶玉織物材木香油其他の貴い物を有り餘る程に澤山持つて參りましたから、モーゼは之を以て雛形通りの立派な幕屋を野原の眞中に造りまして之を神の宮と致しました。神の宮と申しましても何も偶像や本尊を飾り立てたのではなく、唯幕屋の一番奥の方にモーゼがシナイ山で戴いた十誡の石の板を一つの木の櫃に納れてそれを一番神聖なものとしたのであります。イスラエルの民は

此の幕屋に集つてエホバの神を拜んだのでありますから、之が今日の教會の起原となつたのであります。勿論神樣は手で造つた神殿の中に住み給ふお方ではありませんから、如何なる所でも神を禮拜する事は自由でありますが、併し多くの人が心を合せて神を禮拜し讃美をなし祈禱を捧げる爲に特別に教會と云ふものを建てゝ之を最も神聖なる場所とする事は甚だ大切であります。故に昔から今まで偉い人は皆教會を尊んで其所で神を拜する事を怠りません。我等の主イエスキリストも御幼少の時から神の殿たる教會に行かるゝ事を最も樂しみ給ひました。教會は此世の中で一番神聖な清い場所でありますから、諸君は其教會に這入つた時に出來るだけ行儀を正しくし言語を愼しみ殊更に近く天の父に見える樣な氣持になつて萬事に靜肅にせねばなりません。日本の教會は西洋諸國の大教會の樣に其建築も裝飾も立派ではありませんが神樣は奇麗な神殿よりは清い人の心の中に住み給ふお方でありますから、日本の信者は一層心を清くして本當に神樣の御心に適ふ禮拜を致したいものであります。諸君も小さい個

者として何處までも教會を尊び神の家に來る事を好む樣に今から習慣を作らねばなりません。西洋諸國の教會へ行つて見ますと澤山の子供が其兩親と一緒に禮拜說教の時にも甚だ靜肅にして牧師の說教を聽いて居るのは實に感心ださうであります。さういふ子供は成長すれば立派な信者となるのであります。諸君は高貴な御方の前に出づる時は誰れでも行儀を愼しみませう。又貴人の御殿に參つた時は其處で亂暴をする人はありますまい。教會は貴い〳〵神樣の御殿でありますから、私共が天皇陛下の皇居に參內した時の如く又はそれ以上に心も行も清く正しくする事を努めねばなりません。昔イスラエルの幕屋に這入るには必ず手足を洗つて清い體になつてから神殿に上り行きました。諸君は水で手足を洗ふ代りに清い心になつて教會に參らねばなりません。清い心とは人を怒つたり恨んだり虛言を云つたり物を欲しがつたりする心を持たないで、本當に神樣の喜び給ふ樣な美しい愛らしい眞直な心を指して云ふのであります。今日の金言は忘れない樣に諳誦して下さい。

第三十四課

〔課題〕　ナハブとアビフの暴行。

〔教材〕　出埃及記二四の一。二八の一。利未記八の三〇。九の二二—二四。一〇の一—一一。

〔朗讀〕　利未記一〇の一—一一。

〔金言〕　酒は人をして嘲らしめ濃酒は人をして騷がしむ之に迷はさるゝ者は無智なり。（箴言二〇の一）

〔引照〕　民三の二—四。箴二三の二三—三二。哥前六の一九—二〇。

〔教訓〕　凡て肉體の不養生になり善惡の判斷を誤まらしめ、病氣を起し不道德を招く所の有害物を飲食し、神の宮殿たる此の肉體を汚す所の事をなすの大なる罪なる事を悟らしめ、禁酒禁煙の習慣を幼時より形造らしむるを以て此の學課の目的とす。

〔教話〕　前の日課に於て諸君は今日の教會の起原たるイスラエルの幕屋の構造に就いて學んだのでありますが、其の幕屋の中に神を禮拜するには種々な儀式が定められたのであります。モーゼは神の命を受けて是等の儀式を定めました が自分一人で凡ての儀式を行ふ事が出來ませんから兄弟のアロンを自分と共に神殿の祭司の役に就かしめました。それから尙外のお勤めを行はせる爲にアロンの子四人の中で長男のナハブと次男のアビフとを選んで同しく祭司となしました。祭司の主なる役目は種々な潔め事を行ひ香を焚き燔祭とか罪祭とか云つて羊や山羊やを犧牲として祭壇の上に献げる事でありました。そこで彼等がイスラエルの爲に代つて其等の献物を致した時に神は喜んで之を受け給ふた證據として、何時でも天から火が降つて其等の犧牲を燒き盡したと云ふ事であります。民は之を見て怖れ畏み平伏して神を拜したと書いてあります。

扨て一日非常な出來事が持ち上りました。それはアロンの子ナハブとアビフが神殿の中に於て神の命に背いた仕方で香を焚いた爲に忽ち神の罰を受けて二

人共即座に死んでしまつた事であります。唯だ儀式を誤まつた位の事で殺される譯がありませんが、彼等は如何にしたものか、神殿に這入つて香を焚く前に酒を飲んで酩酊し物の判斷を失つた爲に祭司の貴い役目を汚して神の怒りに觸れなのであります。一體酒に醉ふ事は凡ての惡事の本であります。凡ての過も罪も酒から初まるのが多くあります。之は神の宮殿として造られた人間の體を罪の道具に變へる事でありますから、其の罪はエホバの幕屋を汚すよりも一層重いのであります。ナハブとアビフが酒に醉ふて宮殿の中になすまじき事をなしたのは、啻に神殿を汚すばかりでなく肉體の神殿を汚したのであります。人は酒を飲むと體が無暗に奮興されて氣が大きくなり、濫りに面白くなつたり騷ぎたくなつたり、果は喧嘩口論をしたりするのでありますから、他の人から見れば全で狂氣の樣で神の子供たる人間とは到底思はれないのであります。酒を飲むと一時愉快の樣になりますが結局體を壞はし心を鈍らし品行を破る事になりますから遂には之を悔いない者はありません。併し一度酒を飲む習慣がつ

くと惡いと思つても中々止められないものですから、人は幼少の時から斷然此の毒水を口に入れないと云ふ決心をする事が一番大切であります。日本ではまだ飲酒の惡風が盛んでありますが追々禁酒をする人が多くなつて來て遂には人と交際をするのに酒を飲まずともよい樣になる事は請合ひです。日本にも基督敎會の人々が先に立つて禁酒會と云ふものが起され、其の會員が次第に增加して非常に善い働きをして居ります。諸君も後日成長したら其の會員になるもよろしうありませう。若し又禁酒會員にならないでもクリスチャンたる者は此の肉體を神の宮殿として重んずるのですから斷じて酒を以て之は汚してはなりません。如何ですか諸君は今から大きくなつても決して酒を飲まぬと云ふ立派な決心を神樣の前にする事が出來ますか。

第三十五課

【課題】　間者の報告。

【敎材】　民數紀略十二の十六より十四の三十八まで。

【朗讀】　民十三の十六より二十五まで。

【金言】　若し神われらを守らば誰か我儕に敵せん乎（羅八の三一）及び唯エホバに逆らふ勿れ又其地の民を懼るゝ勿れ（民一四の九）。

【引照】　詩一〇六の二三—二七。アモス二の九—一一。

【敎訓】　兒童をして眞正の勇氣の何物たるかを知らしめ、其眞勇は只だ神を信ずるによりて起り得ることを敎へ、彼等をして今より少年の英雄たらんとする志を起さしむるを以て此學課の目的とす。

【敎話】　イスラエルの民は一年間シナイ山の麓に天幕を張つて住んで居りましたが、モーゼは神の命を受け彼等を率ひて此處を出發し、段々目的のカナンの

地に近づきまして、遂にカナンの地の南の端にあるバランの野と云ふ處に陣營を張りました。そこでモーゼは愈々カナンの地に攻め入らうと思ひましたが、敵の內情を偵察する爲めイスラエルの十二の支族から一人づゝの領袖を選り拔きまして、之を間諜としてカナンの地に遣はし、其處に住む民の强いか弱いか、其人民の數の多いか少ないか、又其土地は肥えてをるか瘠せてをるか、其外軍事上の種々な情況を視て來て報告をせよと命じました。十二人の間者はこつそりカナンの地に入り込んで四十日の間其國の樣子を偵察いたしましたが、歸りがけに其の地に成つてをる一房の葡萄の枝を切り取つて產物の見本に致しました。其房が餘り大きく重いので竿を貫して二人して之を擔いで來た位でした。彼等はモーゼに報告して申しますに、誠にあの國は乳と蜜の流れる程に豐かな國であります、而してそこに住んで居る民は我等より餘程强い民で其城は非常に堅固だから、到底之を攻め取ることは出來ませんと申しました。其時十二人の中のカルブとヨシュア二人丈けは此報告を打ち消して「我儕直ちに上りゆきて

之を攻め取らん、我等は必ず之に勝つことを得ん」と申しました。此二人はエホバの神を信ずる信仰が非常に强い人でありましたので、カナンの民は何程强くとも、若しイスラエルの民がエホバに倚り賴んで戰爭をするならば必ず勝つと信じて斯樣に申したのであります。彼等はエホバに惠まれましたが他の十人は罰せられました。諸君私共に何より大切なるのは勇氣であります、勇氣の乏しい人は決して偉い人物になることは出來ません。尤も勇氣にも色々な種類がありますが。本當の勇氣は沈勇とも眞勇とも申しまして、心がしつかり落ち着いて物に動せない所から生ずるものであります。

斯ういふ勇氣は神を信ずる信仰がなくては出るものではありません。昔から今まで偉い勇者は皆な神を信じた人々であります。日淸戰爭の黃海の役の後に伊東元帥が作つた歌に「神はいかでか義に背く、敵の勝利を護るべき、看よ定遠は沈めたり」と云ふ面白い歌があります。諸君も今から神を信じて小さい英雄とならねばなりません、女のお子さん方も勇氣がなければ貞女にも賢母にもな

ることは出來ません。どうぞ勇氣のある女の兒となつて下さい（教師は自由に勇將猛卒其他平時に於ける勇者の物語を挿むことを得）

第三十六課

〔課題〕荒野に於ける困難。

〔教材〕民數紀略二十章一節より廿一章九節まで。

〔朗讀〕民二十章二節より十一節まで。

〔金言〕斯くてその困苦のうちにてエホバを呼はりたればエホバは之を患難よりたすけ出せり（詩一〇七の六）。

〔引照〕王下一八の四。詩七八の一五—四二。一〇七の四—一六。賽四八の二一。一。約三の一—一七。哥前一〇の一—六。

〔教訓〕凡て神を信せず罪を犯す者には常に困苦と悲哀とあり、之れに反して如何なる艱難辛苦の中にも天父を信じ之れに倚り頼む者は力を得て安心と喜悅と平和とを與へらるべきこと、恰かも孝子が父母に信頼する時は何よりも幸福にして安全なるが如きことを生徒に會得せしむるを以て此學課の目的と

す。

〔敎話〕　イスラエルの民は愈よカナンの地に近づきましてカデシと云ふ處まで來て其處に陣營を張りました。モーゼは先きに十二人の間者を遣はして敵地の有樣を偵察させましたが、彼等の多數の報告によれば、土地は誠に腴へて產物も饒かであるが、其處に住む民が勇猛で人數も多いから到底攻め入ることが出來ないと云ふ事でありました。イスラエルの民は之を聞いて皆な恐れましたから、モーゼも據ろなく進擊を見合せました。そこでカデシと云ふ處に屯して居る間に非常に困難な事が起つて來ました。それは旱魃の爲め井水がかれて仕舞つて民も畜類も水を飲むことが出來ない樣になつたことです、世の中には水の無いほど困つた事は無いもので、イスラエルの民は非常に困難しましたから、彼等はモーゼとアロンの許にやつて來て頻りに不平を唱へ、何故に汝はエヂプトの地より我等を導き出して曠野の中に死なしめる樣な事をする乎など丶詰責致しました。モーゼもアロンも堪りかねてエホバの神に號泣して其御助けを願

つたのであります。そこでエホバの神はモーゼに命じて、汝宜しくイスラエルの全會衆の前に於て汝の杖を以て巖を打つべし、然らば滾々たる清水が其巖石の中から流れ出づるであらうと仰せられました。そこでモーゼとアロンは其通りに致しましたが果して水が河の樣に流れ出で丶民と畜獸とは辛くも死ぬことを免れました。之は隨分不思議な物語りですが、今日でも普通の井戸水が涸れた時は堀拔井戸と稱へて巖石を堀り拔くと、そこから清い水が何程でも噴き出だすものでありますから多分モーゼは神の命を受けて此事を民に敎へたのでありませう。水の困難は一先づ免れましたが、今一つの困難はカデシの野とカナンの國との間に、エドム國と稱する一つの國が挾まつてをるので、其國を通り拔けないでは非常な大迂回をせねばならぬと云ふ一事であります。然るにモーゼは使者をやつてエドム王に談判させて其國を通り拔けてカンナの地に這入る事を承諾させやうと致しましたが、エドム王は頑として其請ひを容れず、若し强いて國を通過せやうとするならば當方にも覺悟があると言つて戰爭の準備を

なしました。それで萬々已むことを得ずに、折角辿つて來た曠野の路を大戻りに戻つて、遙々紅海の道からズツト東の方に廻りまして、エドムの國を回避してカナンの地に入らんと試みたのであります。(地圖によりてカナンとカデシの中間に横はるエドムの位地を示すべし。丁度日本で云へば東京から大阪にくるのに東海道を通れないから信濃越後越前加賀を經て北陸道の方から畿内に入るのと同じ事です)。民は又もモーゼとアロンに向て非常に不平を鳴らしましたが、致し方がありませんでした。民の不幸は尙ほも其上に重なりました、それは火の樣な毒氣を持つてをる多くの蛇が野に出て民を片端から嚙み殺しましたことであります。イスラエル人の荒野の大學校は斯の如き患難辛苦の修業場でありました。其時アロンはホル山と云ふ山の頂にて、天國に召されてしまひましたが、其後嗣者はエレアザルと云ふ人が神に選ばれて民の祭司となつたのであります。モーゼは神に祈つて此の恐ろしい蛇を除去することを願ひましたが、神は蛇をとりのける代りに大きな蛇の形を銅で造つて之を竿の上にかけて、

蛇にかまれたものは此の銅製の蛇を仰ぎ見る時は直ちに其傷が癒されたといふ事です。之れは自分一個の困難よりも更に大いなる他人の困難を見る毎に、大に慰め勵まされると云ふ眞理を比喩の如くにして敎へてあるのであります。「モーゼ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし」とあるのは、イエスキリストが人間を救ふために十字架に懸かり給ふた事を示すものであります。人は苦しみにも悲しみにも常に自分以上の偉い御方の苦しみ悲みを知ることが肝要であります。詩篇の金言にはイエスを呼べと書いてはないけれどもエホバもキリストもつまりは同じ自分以上の主を指して云ふのであります。私共もイスラエルの民が困難の時に銅の蛇を仰いだ樣に、同じ困難の時に神とキリストとを仰ぐことを止めてはなりません。イスラエルの民は曠野の學校で信じ頼よると云ふ事と苦みの時に主の助けを呼び求めると云ふ事の二大敎訓を學びました。

第三十七課

〔課題〕　モーゼの死。

〔教材〕　民數紀略二七の一五―二〇。申命記三四の一―一二。

〔朗讀〕　申命記三四の一―八。

〔金言〕　我は復生なり生命なり我を信ずる者は死ぬるとも生くべし（約一一の二五）。

〔引照〕　申三の二三―二九。希三の一―一九。

〔教訓〕　モーゼの如く此世に於て神に忠義を盡したる人は、死しても限りなく神と共に生き存らへて其靈魂死ぬることなし、故に死は決して恐るべき者にあらず、天國に入るの門出なれば、悲まずして死を迎ふべきものなることを知らしむるを以て此學課の目的とす。

〔教話〕　モーゼは百二十歳の老人になりましたが心も體も共に壯健な人でありましたから、目も矇まず氣力も衰へませんでした。彼は諸君が前々からの學課で學んだ通りありとあらゆる艱難辛苦を忍んで、イスラエルの民をエヂプトの地から導き出しまして、永い年月アラビヤの野をさまよい歩るき、神の約束し給へるカナンの地に向つて前進したのであります。民は餘りの困難に辛抱し切れないで屢々エホバの神に背き種々な罪を犯しましたが、獨りモーゼは能くも忍耐して彼等を導き教へました。かくも忠實な神の僕でありましたから神はモーゼの生きて居る間に其褒美としてモーゼを始めイスラエルの民を約束の地カナンに入らしめ給たかと云ふに決して开では有ませんでした。モーゼが神の御傍に召されて天國の人となる時が愈よ近づきましたので、神は彼に命じてヨシユアを選んで其の後嗣としてイスラエルの民を指揮する大將軍となさしめ給ひました。さうしてモーゼを子ボ山の絶頂ピスガの巔に登らせまして、その高山からカナンの全地を一眸の中に瞰下させ給ひまして、是れわが汝の子孫に與へる所のカナンの地であるとお示しになりました。モーゼは神の約束を信じて

少しも疑ひませんから、自分が其地に入ることは出來ないでも、子孫が必ず出來ることを確信して安心して其地に死にました。聖書に『エホバモアブの地の谷に之を葬り給へり、今日まで其墓を知る人なし』と書いてあります。モーゼは何時の間にかエホバに召されて其御許に參つたのであります。彼れはカナンの地に攻め入る代りに天國に凱旋したのであります。自分の存命中に目的を達することは出來ませんでしたが、天國に行つてイスラエルの民がカナンの地に入るのを見て居りました。モーゼの肉體はモアブの地に葬られましたが、其靈魂は何時までも生き存らへて神と共に永遠無窮に存在して居るのであります。

して見るとモーゼの樣な義しき人の死と云ふものは少しも恐れたり悲んだりするに足りないものであります。此世に居る時に何時でも神と面を對せて居るやうに、此世を去つては一層近く面あたり神と一緒に暮すことが出來るのであります。其樣な人に取つては死ぬと云ふことは丁度人が故郷に歸るやうなものであります。信仰の强い人は決

して死を怖れません。私共は神が召し給ふ時に何時でも喜んで天國に凱旋するやうにせねばなりません。キリストは『我を信ずるものは死ぬるとも生くべし』と仰せられました。クリスチャンの死は天國への誕生であります。喜んで祝すべきものであります。（敎師は美しき信仰を持ちて死せる人々の事實談を引例して死の恐怖を生徒の心より除き去るやう努むべし）今日の學課は死ぬことを恐れてはならぬと云ふ敎訓であります。

第三十八課

〔課題〕　復習（第二十七課より第三十八課まで）

〔朗讀〕　教師自ら詩篇第百七篇一節より八節迄を朗讀すべし。

〔準備〕　教師は今日復習すべき左の毎課の金言を紙片に一枚づゝ書き來り、之を生徒に配布して生徒をして先づ朗讀せしめ、其金言に適當なる物語を記憶より喚起して一事づゝ語らしむる樣にすべし但し括弧内の課題は書く勿れ。

（一）其子やゝ成長して精神强健に智慧みち神の恩寵その上に臨れり（モーゼの幼時）

（二）我れ汝を教へ汝を歩むべき途に導きわが目を汝に注めてさとさん（ホレブ山の燃ゆる棘）

（三）惡しき者は悲み多かれどエホバに依賴むものは憐憫にて圍まれん（モーゼ、アロン、パロの前に出づ）

（四）わが力わが歌はエホバ也、彼は我が救拯となり給へり、彼は我神なり我これを頌美へん（逾越の夜）

（五）信仰によりて彼等は紅海を陸の如く渉りしがエヂプトの人は之を渉らんとして溺れ死たり（イスラエル軍紅海を渉る）

（六）我儕の先祖野にてマナを食へり錄して天よりパンを彼等に賜へて食はしむと有るが如し（荒野のマナ）

（七）エホバの法は全くして靈魂を生きかへらしめエホバの證詞は堅くして愚かなる者を智からしむ（律法を與へらる）

（八）神の家は活ける神の教會なり眞理の柱と基なり（荒野に於ける幕屋）

（九）酒は人をして嘲らしめ濃酒は人をして騷がしむ之に迷はさるゝ者は無智なり（ナハブとアビフの暴行）

（十）若し神我儕を守らば誰か我儕に敵せんや（間者の報告）

（十一）斯くてその困苦のうちにてエホバを呼はりたればエホバは之を患難より

たすけ出せり（荒野に於ける困難）

（十二）我は復生なり生命なり我を信ずる者は死ぬるとも生くべし（モーゼの死）

〔問答〕教師は左の問を發し、指名して答へしむ。

（一）棄兒のモーゼは如何にしてパロ王の宮殿に成長するに至りしか（二）モーゼがイスラエル人をエヂプトより救ひ出さんと志せし理由如何（三）モーゼがパロ王に惡まれてミデアンの野に遁れ羊牧をなし居りし時ホレブ山にて神は何事を彼に命せしや（四）モーゼとアロンは屢次パロ王の前に出でゝ何事を請求せしや（五）神は何故に十種の厄難をエヂプトの國に降し給ひしや（六）逾越の節と云ふ祭日は何事を紀念するものなりや、羊の血を門に塗り堅パンを旅裝のまゝ嚙ぢるのは何の紀念なりや（七）六十萬のイスラエル人は埃及軍に追ひかけられし時如何にして紅海を渉りしや（八）イスラエル人が曠野にて食物なく餓死せんとせし時神は何々を以て之を養ひ給ひしや（九）モーゼがシナイ山に登りて神より受けし十誡のうち汝の記憶し居る者を語れ（偶像、安息日、孝行、勿怒、勿

僞、勿貪の六誡にて足れり）（十）モーゼが神の命を受けて曠野に建てし神殿は如何なるものなりしや（十一）神の教會と偶像の宮殿とは如何なる點が尤も相違するや（十二）ナハブとアビフと云ふアロンの二子は何故神殿中に即死せしや（十三）飲酒の害ある理由を述べよ（十四）モーゼがカナンの地を偵察する爲め遣はせし間者は如何なる報告を持ち歸りしや（十五）イスラエルの民がカデシに陣營中飲水絶えて困難せし時如何にして水を得たるか（十六）イスラエルはカナンの南端迄で來りしに何故非常の遠廻りをして東北の方よりカナンに進みしや（十七）モーゼが銅製の蛇を木にかけて民をして仰がしめたる理由如何（十八）イエスキリストの十字架は如何なる慰めを苦める人々に與ふるや（十九）モーゼは死ぬ前にカナンの地を如何にして見しや（二十）左の計算を試みて答ふべし。モーゼの死せし時の年齡に、エヂプトに起りし厄難の種類の數を加へ、之をエヂプト軍の戰車の數より減じ、之をモーゼがシナイ山にて十誡を書きつけし石の版の數にて除し、之にモーゼがカナンの地に遣はせし間者の數を乘じて得る所

の數を問ふ。(式。百二十に十を加へ之を六百より減じ之を二にて除し之に十二を乘じて二千八百二十なる答を得)

第三十九課

【課題】　種播きの比喩。

【教材】　馬太一三の一—二三。路加八の四—一五。

【朗讀】　路八の四—一五。

【金言】　汝等道を行ふ者となるべし徒之を聞くのみにして自己を欺く者となる勿れ(雅一の二二)。

【教訓】　如何なる良き教も只だ聞くのみにして之を行ひに現はさざれば何の益もなきものなれば生徒をして學ぶ所の日課を實行するの決心を起さしむるを以て此學課の目的とす。

【注意】　今日より年末前の八週間に於て暫らく舊約の物語を離れ、新約のイエスの比喩を材料として日課を編成す。比喩は眞理の隱れたる意味を說き明かすを以て目的とす。而して主の比喩は宗教的の意味深遠にして容易に曉りが

たき高尚なる教訓を有すと雖も、十一二歳の兒童の教材としては出來得る丈け平易に子供らしく之を解説して兒童の爲めに手近き教訓となる樣物語るべし。其爲め教師は聖書の本文を反覆熟讀して殆ど諳誦するばかりになり居るを要す。

〔教話〕　或時イエス樣はガリラヤの湖の岸邊にお出でになりますと、例の如く大勢の群衆が御説教を聞かうとして押し寄せて參りました。餘り大勢の人で押し寄せますからイエス樣はそこに繫いである小舟の上にお乘りになりまして、陸から少し離れて其舟の上から御説教をなさいました。人々は岸に立つて其御話を聞いてをりました。隨分變つた教壇ではありませんか。ユダヤの國は暖國でありますからイエス樣は能くこの樣な野外の説教をなさいました。恰度其頃は春の種播き時でありまして、ガリラヤ湖の岸邊に百姓があちらこちらに種を播いてをるのを御覽になりましたが、イエス樣はそれを人々に指さして示しながら、かういふ面白い比喩談をなさいました。或百姓が種を播かうと思つ

て野に出でたが、立派に耕してある畑に行く途中の路傍に落ちた種があつた。路傍であるから人に踐みつけられたり雀や烏のやうな空の鳥が飛んできて之を啄ばみ食つたりして仕舞つた。又土の薄い石地に落ちた種があつたが、直ぐに生え出でたけれども日が出でゝ來てカン〳〵照りつけたものだから忽ちに枯れて仕舞つた。それは根が充分に無いからである。又他の種は棘の中に落ちたのである。此種はいくらか大きく生長したけれども棘も一緒に育ちて之を蔽ひ塞いだから終には枯れて仕舞つた。ところが耕してある沃き地に播かれた種は如何であるかと云ふと、土地が肥へて日當りもよく雨も露もよく霑ほすものであるから、其種は立派に生へ出でゝ芽を出し莖を出し花を開き實を結んで一粒の種から三十倍又は六十倍又は百倍も多くの實を結んだのである。イエス樣はかういふ比喩談をなさいましたが弟子等は一向其意味が解かりませんでしたから之を御尋ね致しましたので、イエス樣は斯ういふ風に説き明して下さいました。路傍におちた種や石地に落ちた種は良い説教や良い日課を學んでも之を行はう

としないで只だ耳から耳へ通り抜けにするやうな人を譬へたのである。さういふ人は根の無い植物と同じですぐに枯れてしまふ。次に棘の中に落ちた種といふのは少しは良い教に從つて行を改めても固からの惡い癖に負けてしまつて充分に善い行をすることの出來ない人を譬へたのである。さういふ人は棘に塞がれて生長し得ない植物と同じである。沃い地に播れた種とは聞いて行ふ人を指していふのである。良い教を聞いて之を身に行ふ人は段々に其行が正しくなり、立派な品行の人となつて三十倍も六十倍も百倍もの善い事を世の中の爲めにすることが出來るのである。是れは聞いて行ふ人であつて一番天の父が喜び給ふ子供である。かやうにイエス樣が說き明して下さいました。諸子は此の四つの種のうちで何の種類にあてはまるでせうか、路傍の種か、石地の種か、棘の中の種か、沃き地の種か、よく自分で考へて見て下さい。

第四十課

〔課題〕善きサマリヤ人。

〔教材〕路加傳十章二十五節より三十七節迄。

〔朗讀〕路加傳十章三十節より三十七節迄。

〔金言〕爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く隣を愛すべし（路一〇の二七）

〔引照〕約一三の三四—三五。羅一三の八—一〇。哥前の一三。約壹三の一〇—一八。

〔教訓〕兒童をして神と人とに對する愛心を强めしめ、且つ其の愛心を實行に現はすの決心をなさしむるを以て此學課の目的とす。

〔教話〕或時イエス樣が神殿の中で大勢の人々に說教をしておゐでになりますと、そこに一人の教法師と名けられる學者がやつて來て、何かイエス樣を困ら

せる様な難問を懸けやうと思つて、斯ういふ問ひを發しました。先生私は何ういふ事をしたならば永生を受けて何時までも神様と共に生き存らへる事が出來ませうか、一つ其の御傳授を願ひたいものでありますと、かやうに申しました。するとイエス様が仰やいますには、お前は全體敎法師であるから舊約聖書のモーゼの律法の中に其事について書いてあるのを知つてをる筈でないか、其を知つて居るなら何と書いてあるか言ふて見よと仰せられました。そこで敎法師は得意顏をして舊約の律法には「爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く隣りを愛すべし」と書いてありますと答へました。イエス様は此答を聞いて大層お賞めになつて、其通りである汝もし有り丈けの力を盡して神様と隣人とを愛するならば、必ず限りなき生命を得ることが出來るであらうと仰せられました。そこで敎法師は自分が其通り行つて居ると云ふ事を示さうと思つて、一體此の隣りと云ふのは誰れの事でせうか、向ふ三軒兩隣り、親戚朋友、同じ國の人民などを云ふのでありませう

と思ひますが、それなら私は何時でも我隣りを愛して居りますが如何でせうかとお尋ね申しました。

するとイエス様は斯ういふ比喩話をしてお聞かせになりました。或人ユダヤの都エルサレムからエリコと云ふ山中の邑に下り行く途中に强盜に遇つた。此邊はユダヤの荒野で非常に寥しい處であるから能く剽盜が出て旅人を惱ますのである。强盜は此人を捕へて衣服を剝ぎ取り之を打ち擲き死ぬるばかりにして路傍に棄て行つた。其の時間もなくエルサレムの神殿の事を司どる或祭司がそこを通りかゝつて其有樣を見たけれども、自分は急ぎの旅でその樣な事に費やす暇がないと云つて其塲を看過しにして行つて仕舞つた。又同じく神の殿に仕へるレビの役人も此處を通りかゝつて親しく此有樣を見たけれども、自分は斯んな事に立ちさわつて言ひがゝりになつては大變だと思つてサッサと見ぬ振りをして其處を通ほり過ぎた。ところが今度は或サマリア人が旅行をして丁度ここに來かゝつたが、彼は之を見て忽ち不憫の心を催ふして何とかして此不幸な

人を助けてやりたいと思ひ直ちに近寄つて、其半死半生の人をいたわり、持ち合せの油と酒とを以て其の傷口を洗滌し之を叮嚀に繃帯して、それから自分が乗つて來た驢馬に其人を乗せて、近村の旅舍迄連れていつて親切に之を介抱したのである。翌日自分は出立する時に銀子二枚を旅舍の主人に渡して申すには、充分に氣を附けて此人を介抱して呉れ、もし此銀子で費用が足りない場合には、私が歸り途に立寄る時に殘らず辨償するから夫迄では立替へて置いて呉れよと言ひ遺いて、萬事を詳して主人に賴んで出で行いたのである。偖てお前も知つてる通り、サマリヤ人とユダヤ人とは敵國の間柄で互に交際しない位であるし、夫れに此人は全く見ず知らずの他人であるのに、此憐れな人を見て可愛相に思つて之を助けたのは、立派なユダヤの祭司でもなくレビの人でもなく、却つて此敵國のサマリヤの人であつた。さればお前に尋ねたい事は外でもない、一體此の祭司とレビ人とサマリヤ人と三人の中で誰が本當に此强盜に遇つた人の隣であるとお前は思ふか、かやうにイエス樣がお尋ねになりましたので、敎

法師はそのサマリヤ人こそ眞實の隣人でありますとお答へ申しました。イエス樣は之を聞いて仰せられますには、汝の言ふ通りである、隣りと云ふのは總ての不憫なる者、汝の助けを求める者、此世の中の凡ての同胞兄弟を指して云ふので、決して向ふ三軒兩隣り親戚朋友ばかりを指すのではない。天の父が此世に生み給ふた凡ての人間は皆な汝の同胞兄弟である、汝が全心全力を盡して愛さねばならぬ汝の隣人であると、かやうに御敎訓になりました。是が有名な『善きサマリヤ人の比喩』と申すのであります。私共は此サマリヤ人に倣つて神を愛し人を愛せねばなりませぬ。

第四十一課

〔課題〕　放蕩息子の比喩。

〔教材〕　路加傳十五章十一節より二十四節迄。

〔朗讀〕　路加傳十五章十一節より二十節まで。

〔金言〕　一人の罪ある人悔改めなば悔改むるに及ばざる九十九の義人よりは倘天に於て喜あらん。（路一五の七）

〔引照〕　詩五一。太一八の一一―一四。路一五の一一―一〇。

〔教訓〕　兒童をして父母に對する不孝の經驗より推し測りて、天父の聖旨に背く罪の如何に恐るべきものなるかを悟らしめ、一たび過てる時は飜然悔い改めて罪を謝し、孝子となるべきことを心に期せしむるを以て此學課の目的とす。

〔備考〕　此比喩の眞意が宗教的なるは勿論なれども、十一、二歳の兒童には主として孝道の方面より說くの外なし。彼等は肉體の父母に對する孝道より類推

して終には天父に對する從順の道を學ぶに至るべし。孝子の門より出づるものは豈獨り忠臣のみならんや。倘此比喩の後半部兄息子の不平の物語は故意と此課より除けり。

〔教話〕　世の中で何處が一番樂しい所かと云ふとそれは良い家庭ほど樂しい所はありません。良い家庭と云ふのは親子睦まじく兄弟仲善く一家心を合せて互に愛し愛されて樂しく其日を送つてゐる家を云ふのであります。ユダヤの國の或處に其樣な樂しい家庭がありました。其家は非常な金滿家で何物にも不自由はせず、それに父母の間に二人の男の子が生れて一家の中は何時も樂しい天國の樣でありました。併し是は子供達がまだ幼少かつた時丈けの事でした。子供等が段々成長して青年の年頃になりますと、其中の弟の方の子は次第に我儘の性質が增長して、家の中に父母と一緒に暮して居るのを何となく窮屈に思ひまして、自分獨りで勝手に暮して見たくなりました。そこで父に向つて『お父さん、あなたが死ぬ時はどうせ財產の半分は私に分配して下さるんでせう。ど

うせ下さる物なら一層の事今のうちに分けて下さい　私は其金で獨立しますから』とかやうに申しました。父は非常に此弟の子を愛して居りましたから、其言ふ事に無理があつても、どうせ聽き容れて思ひ止まりさうもないのを見て、終に已むことを得ず其通りに弟息子の財産を分けてやりました。弟息子は財産を分けて貰つてからまだ幾日もたゝないのに、其財産を殘らず賣り拂つて現金に取り纏めて、之を懷にして、遠國に旅立ちしてしまひました。此時以後此の家庭は全く一變しました。父は自分の尤も愛してをる弟息子に家出をされてから、寢ても覺めても其身の上を思ひやつて心配で心配でたまりません。一家は火が消えたやうに淋しくなつてしまひました。ところが弟息子は少しもその樣な事に氣を留めません、旅の空で氣儘氣隨に振る舞つて好き放題な事ばかりしてゐます。懷ろの金がある間は之を湯水のやうに振り撒いて金の威光で隨分威張りもしましたが、間もなく其財産は放蕩の爲めに皆な耗やして仕舞ひました。金の有る間こそは友達も言ふ事を聞きますが一旦零落すると誰れ一人彼れを顧

みるものはありません。人情紙より薄いと云ふのは此事であります。彼は段々貧乏になつて困つて居ると、惡い事は續いて來るもので其土地に非常な大饑饉が起つてそろ〳〵食物に乏しくなつてきました。饑饉の時は金錢が何程澤山あつても食物に乏しくなるものですが、まして一錢の貯へもない零落の身の上ですから、どうにもかうにも仕方がなくなりました。かういふ時に何か職業でも覺へて居れば勞働して食ふことも出來ませうが、日頃怠惰に日を送つてゐた爲めに今更ら氣の利いた仕事にありつくことも出來ないで、到頭其地の或人に食客のやうに身を寄せました。其人も勿論只だ食はせて置く譯にゆきませんから、少し離れた野原にある豕小屋に行つて豕を牧はせることに致しました。金滿家の秘藏息子は零落して終に豕牧ひにまで成り下つたのであります。隨分酷い墮落ではありませんか。かれは空腹の餘り豕の食する豆莢を以て自分の腹を果たさうと思ふほどであるけれども、何にも彼れに與へる者はないのであります。ソコデ彼れは漸やく心の目が醒めまして、さて能く〳〵自分で自分の事を省み

て見まするとこれは又何とした事であらう。考へて見れば自分の實家には食物は有りあまつてゐて傭人の僕共が幾人でも居るのに、我は其家の秘藏息子に生れてゐながら今は此處で餓死しやうとしてゐる。アヽ是れ本當に何事であらう實に誤つた失敗つた。いざ此上は仕方がない。是から斷然決心して我父の家に歸つて行くことにせう、勿論お父様は決して自分のやうな不孝者をお免し下さる氣遣はないから、これから父の所に往つて斯ういはふ、お父様私は天の神様とあなたとの前に大きな罪を犯したのであるから、最早やあなたの息子と呼ばれる價値がないのであります。それであるから子供ではなく只だ傭人の一人として食物を與へて下さりさへすればそれで全く滿足であります、どうぞ夫れ丈けは許して下さいと。斯う云つて歸つて行かう、まさかお父様は擲き出しもなさるまいと斯く考へて故郷に歸つて行きました。ところが家の方では此日も亦た年老いたる父が門口に立つて子供が歸つて來はせんかと脊延びをして見てをるのであります。遙かあちらの途の方から弟息子の姿が見えますと、父はそれ

と見るや跣足のまゝで趨り出でゝ、乞食の樣なぼろ〳〵した若物をきてゐる子供の頸に抱き付て嬉し涙にかきくれました。子供は喫驚して先きに考へた通り是迄の罪を御詫び致し最早や息子扱ひにされる資格がないから僕の一人のやうにして下さいと申し出しましたが、父は一向そのやうな事を耳にも入れませんで、僕を呼んで一番美麗な衣服を持つて來て之にきせ、其指には寶石の指環をはめ、其足には立派な履をはかせと命じました。それから又肥えた犢を牽き來つて之を屠り非常な御馳走をして大宴會を開いて邊り近所のものや家内中の者と一緒に樂しみ始めました。其時父の申すには、わが子は一度死んでしまつたのが復た生きて來て一度失つたのが復見付かつたのであるから、こんなに嬉しい事はない、皆さん何卒喜んで下さいと云つて大喜びを致しました。放蕩息子が悔い改めて歸つて來たので其家庭は再び天國のやうに樂しい所となつたのであります。諸君、父母の愛は實にかういふものであります。孝行を盡さないで濟みませうか。さうして此父母の愛より尚一層大なる慈愛を以て私其人間を

愛して下さるのは天の父なる神様であります。神は天地の父母であります、神の聖旨に從順なるのは天父に對する孝道であります。罪とは神に對する不孝を云ふのであります。悔改めとは己が不孝の罪を悔いて孝道に立ちかへる事であります。諸君は何卒父母に對し又神に對し孝行な子供となつて下さい「一人の罪ある人悔改めなば天に於て喜びあらん」神は何よりも悔改むる心を喜び給ひます。

第四十二課

【課題】小事に忠なれ。

【教材】馬太傳二十五章十四節より三十節迄。

【朗讀】馬太傳二十五章二十節より二十三節迄。

【金言】善且つ忠なる僕よ爾わづかなる事に忠なり我爾に多きものを督らせん（太二五の二一）。

【引照】路一九の一一—二六。太二四の四五—四七。路一二の四二—四八。

【教訓】人の上に立ちて之を支配せんとする欲望は少年少女の心に早くも萠す性情なり。此性情を聖化し善導するは兒童教育上の一大要義なりとす。されば人の上に立ちて大事を督ごらんとせば先づ小事を忠實に行はざるべからずと云ふ教訓を學ばしむるを以て此學課の目的とす。

【教話】イエスの御弟子達が各々自分で偉い者となつて人の上に立つやうにな

りたいと思つて、心の中で頻りに競爭をして居りましたので、イエスは斯ういふ面白い喩話をしてお聞かせになりました。或處に一人の主人がありました。遠國に旅立せんとして自分の財産を三人の僕に預けて參りました。一人の僕には五千圓、今一人には二千圓さうして今一人には千圓を預けたのであります。なぜ斯ういふ風に金高を違へて預けたかと云ふと其僕共の才能に應じて相當の金高を割り當てたのです。そこで五千圓を預かつた者は之を資本にして商賣をして元金の外に五千圓を儲けました。二千圓を預かつた者も此金を運轉して二千圓の利益を得ました。ところが一千圓を預つた人は横着者で懶惰者でありますから、主人の金をはたらかすのは懶さいと云つて、之を地の中に埋めておきました。程歴てから主人が旅行から歸つて來て三人の僕を呼んで預けた金の會計をいたしました。其時五千圓を預つた者は五千圓の外に又五千圓を持つて來て主人に向ひ「あなたは私に五千圓をお預けになりましたが其金で商賣して外に此五千圓を儲けました、何卒お納め下さい」と申しました。主人は非常に喜び

まして、善且つ忠なる僕ぞと云つて大層お賞めになり、さうして又言はれるには汝は小さな事に忠義だから此上どのやうな大きな事を任せても大丈夫である。今に澤山な財産を任せて之を督らせやう。私はお前の樣な善い僕を持つてゐることを何より嬉いがお前も私と一緒に喜んで呉れと仰やいました。次に二千圓を預かつた僕も外に二千圓の利益を出しましたから同じく大層賞められまして、善且つ忠なる僕ぞ爾の主の歡喜に入れと云ふ言葉を頂戴しました。所が三番目の僕は怖わ〳〵主人の前にまかりでまして旦那樣あなたは何時も嚴しいお方で萬一お金を減らしたりすれば酷くお叱りなさいますから、私はそれが怖くてそつとお金を地の中に穴を堀つて藏して置きました、これが御預りした千圓でございますといつて其金を持ち出しました。すると主人は此横着な僕に向つて何と云れたかと、云ふと惡しく且つ惰れる僕ぞ、汝もしわが嚴しき人なるを知るならば何故銀行に持つて行つて其金を預けなかつたか。銀行に預けて置けば大した利益は得られなくとも、元金と利息だけは慥かに得られるでは

ないか、それを只だ地の中に埋めて置いたとは何事ぞ、汝は僅かの金を預けてこんなに不精で不忠實であるから、到底安心して何事も任せることが出來ない、汝のやうな者は無益の僕である、さつさと外に出て行と云つて追つ拂つてしまひました。イエス樣は此の喩話をお弟子方になさいました。諸君此比喩はどういふ意味でありますか「小事に忠なるものは大事にも忠なり、小事に忠ならざるものは大事にも忠ならず」と云ふことが此話の中に敎へられてをります。皆さんもし大事を任せられる偉い人となりたいと思ふならば先づ目の前の小さい事に忠實でなければなりません。小事に忠なる人は必ず人の信用を受けて多くの人を支配するやうになるものであります。是れはイエス樣の御敎へでありますから決して間違はありません。

第四十三課

〔課題〕　二つの礎。

〔敎材〕　馬太傳七章十六節より二十九節まで。

〔朗讀〕　馬太傳七章廿一節より二十九節まで。

〔金言〕　是故に凡て我此言を聽きて行ふ者を磐の上に家を建てたる智き人に譬へん。雨ふり大水いで風ふきて其家を撞てども倒ふるゝことなし是れ磐を基礎となしたれば也。凡て我此の言を聽きて行はざるものを沙の上に家を建てたる愚かなる人に譬へん。雨ふり大水いで風ふきて其家を撞てば終には倒れて、その傾覆大いなり。(太七の二四—二七)(少しく長文なれども兒童の記憶力を養ふべく此位のものを諳誦せしむることも時として可なるべし)。

〔引照〕　路六の四六—四九。哥前三の一〇—一三。提後二の一九—二一。雅一の二二。

〔教訓〕　第四十課と同じく生徒をして聽きて行ふの如何に大切なるかを知らしめ、二種の建築の比喩によりて此眞理を深く腦裡にうち込むを以て此學課の目的とす。蓋し兒童教育の要は教ふるところを必ず實行せしむるに在ればなり。

〔教話〕　イエス樣のお比喩のうちに二つの基礎の教訓と云ふのがあります。之はイエス樣が澤山の御弟子に向つて種々な善い御說教をなさいました後で、一番お仕舞になさいました御話ですから大層大切な教へであります。どうぞよく記憶して下さい。基礎とは一體何の事ですか（知つてる人は言ふて御覽）左樣です、基礎とは家の土臺の事です。家を建てる時に其建物の動かない樣に地面を掘つて其中に砂利や石を入れて充分に土臺を固めて、それから建築に取りかゝるのです。さうしないと何の樣な立派の建物でも直きに土臺がぐらついて來て、柱が傾いたり壁が落ちたりして、お負けに大風が吹き大水が出たりすると其家は忽ち倒れてしまつて、中に住んでゐる人が大怪我をしたり壓し殺されたりす

るやうな大變ができるのです。それであるから立派な大きな家を建てるには地面を一丈も二丈も深く掘つてセメントでたゝきつけて大きな盤の樣な固い土臺を作つて、それからぼつ〳〵建築にかゝるのであります（兒童は大工や土方の仕事を見るを好むものなれば現在又は曾て實地見聞せることを記憶より呼び起して基礎工事の如何に大切なるかを知らしむべし）。日本でも此頃は隨分高い建物が東京や大阪の樣な大都會には出來てきましたが、亞米利加のニューヨークやワシントンやシカゴなどでは三十階四十階五十階と云ふ樣な高い大建築が建てられてゐます。此等の大建築は非常に良い土臺でないと決して持ちません。五丈も十丈も掘りさげて煉瓦やセメントで岩石のやうに固めてあるのです。それだから地下室といつて地面より下の所にいくつも部屋や穴藏が造られるのです。偖て斯云ふ風に今では建築の事が進歩してまゐりましたが、イエス樣のお いでになつた頃のユダヤの國などではまだ是ほど進歩しませんから、大きな家を建てるには大抵天然の盤を土臺として建てたのであります。此家は大風が吹

いても大雨が降つても大丈夫で決して倒れることがありません。此反對にもし馬鹿な大工があつて沙の上に何の土臺もなしに家を建てたらどうでせう。聖書に書いてある通り雨ふり大水いで風吹きて其家をうてば終には倒れてメチヤメチヤになつてしまひませう。イエス様は此磐の上の家と沙の上の家とのお比喩を以て何ういふ事を敎へられましたかと云ふに、凡て善い敎へを聽いて唯だ耳に聞くばかりではなく自分の身に其通り行ふものは恰も磐の上の家のやうにしつかりして、大丈夫な偉い人となります。之に反していくら善い敎を聞いても只だ耳に聞くばかりでチヨツトも身に行ふことをしない者は丁度沙の上の家のやうに何時でもぐら〳〵して少しもしつかりした所のない人となります。それであるから私共は善い敎を聞くばかりではなく、その聞いた敎を行ひにあらはすのが何より大切であります。私共は沙の上に家を建てた人でなく磐の上に家を建てた人とならねばなりません云ふことを御敎へになつたのであります。どうです諸君は日曜學校で學んだ事を其通り行ふ人とならうといふ決心が

出來ますか。沙の上のぐら〳〵屋さんですか、磐の上のしかり屋さんですか、よく自分で考へて下さい。

第四十四課

〔課題〕賢き童女と愚なる童女。

〔教材〕馬太傳第二十五章一節より十三節迄。

〔朗讀〕同上。

〔金言〕われ怠らずして守れと爾曹に告ぐるは即ち凡ての人に告ぐるなり（可一三の三七）。

〔引照〕路一三の二二―三〇。可一三の三三―三七。撒前五の一―一一。彼後三の八―一三。

〔教訓〕神を愛する者は時々刻々その命を奉じて暫時も油斷すべからず、若し油斷して義務を怠る時は悔ゆとも及ぶなきに至らんことを生徒に向つて深く警戒するを以て此學課の目的とす。

〔教話〕諸君、油斷といふ字はどう書くか知つて居りますか（知る者あらば黒

板又は紙布に書かしむ、もし無くば教師自ら書くべし）左樣です、油斷とは油が斷へると書いてランプの油が盡きてしまふことを云ふのであります。ランプ掃除をする人がうつかりして油の無いことに氣が附かずに火をともしますならば、其ランプはまだ宵のうちに油が斷れて消えてしまひます。之は即ち其人が油斷をしたからであります。日本には油斷大敵と云ふ諺がありますが、成るほど油斷をするほど恐ろしい大敵はありません。戰爭でも其通りで始終斥候兵を出して敵の樣子を探つたり軍事探偵を使つて敵の內情を調べたりするのは皆な油斷をせぬ爲であります。偖て諸君もいつか油斷をして失策たことがありませう。お父さんやお母さんが他方へお出でになつてお留守をしてゐる時に、歸る迄是れ〳〵の事をしてゐておくれと云はれたのに、まだお歸りがあるまいと思つて懶けて遊んでゐるうちに、不意にお歸りになつて面喰つて眞赤な顏をするやうなことがありましたらう。眞赤な顏をする位ならまだしもですが、殊によると大切な用事をせずにゐて、大變な不都合を仕出來すことがあります。滅

車や汽船に乘りおくれて、大切の用事を缺いてしまつたお話も澤山あります。學校の試驗でも其通りで不意に試驗をされてあわてるのは平常に勉强をしてをらないからです。善く出來る生徒は試驗前にあわてゝ俄かに强勉をするやうなことはありません。何時でも用意してゐるからです。油斷大敵と云ふことは何事でも其通りですからよく〳〵注意すべき事であります。

此事についてイエス樣は私共に一の面白い比喩話をお話しになりました。ユダヤの國では婚禮の日に新郎が友達と共に新婦の家にそのお嫁さんを迎ひに行くのであります。そして夜になつてから大勢の人々に送られて、賑かな提灯行列をしながら自分の家に歸つてきて、そこで婚禮の宴會を開くのであります。それで新郎の家に集まつてゐる友達は何時新郎が歸つてくるか分からないですから、宵のうちから詰めかけて色々準備をして待つてゐるのであります。そして愈々新郎新婦の行列が家へ近くなつた時には各自燈火をともして之を出迎へて、一緒に家に這入つて婚禮を祝ふことになつてゐます。ユダヤの國は道が惡

いですから暗い夜に歩くには是非とも燈火が要ります。まして婚禮のやうな茅出度いお祝ひには燈火を持たないで行列に加はることは決して出來ません（葬式にはわざと燈火を持たずして暗夜の行列をなすの風あり、故に燈火なきは何より不吉の兆なり、婚禮に燈火の絶對に必要なるは之が爲也）。かういふ風俗の國柄でありますから、イエス樣は人の油斷をして神樣の御命令に背くことを御いましめになる爲め、此有名な賢愚の童女の比喩話をせられたのであります。

そのお話は次のやうであります。（敎師は茲に馬太傳廿五章一節より十三節迄の物語を聖書に從つて成るべく興味多く語るべし）如何ですか、諸君は此十人の童女のうち油を用意したはうですか又は油をきらしたはうですか。新郎新婦と一緒に家に迎へられた童女ですか。油を買ひに行つて居るうちに締めだされて門のそとで泣き悲んだ童女ですか。怠惰なる者は決して神樣の聖旨に適ふことは出來ません。

此比喩を世の終り又は主の再臨に就ての警告として敎ふるは不可なり。專ら油斷と怠惰とを戒しむるものとして敎ふべし。

第四十五課

〔課題〕謙遜の實例。

〔敎材〕約翰傳第十三章一節より十七節迄。

〔朗讀〕約翰傳第十三章十二節より十七節迄。

〔金言〕我なんぢらに例を示せり、此は我なんぢらに行し如くなんぢらにも行しめんが爲なり（約十三の十五）。

〔引照〕太二〇の二五—二八。可九の三三—三七。一〇の三五—四五。路二二の七—一三。

〔敎訓〕謙りて他人の爲めに盡すことの如何に貴とく氣高き行ひなるかを知らしめ、眞の名譽は人を使ふにあらずして却て人に使はれ、己が勞を以て人の益をはかるにあることを深く心に悟らしむるを以て此學課の目的とす。

〔敎話〕今日はイエス樣がお言葉を以てゝはなく御自分の行ひを以て御敎へに

なりました有名な御教訓を御話し致しませう。ユダヤの國は日本よりも餘程暑い國でありまして、其國の人は外に出る時に跣足のまゝで丁度日本の草履のやうなものをはいて、砂ほこりの中を歩くのでありますから家の中にはいる時には必ず其草履をぬいで水で手足を洗はなければなりません。ことにユダヤ人は日本人と同じく大層清潔を好む人民でありますから、食事をする前には必ず手を洗つてそれから食卓につくのであります。偖てイエス様が此世をお去りになる少し前に御弟子方と一緒に或處で最後の晩食をなさいました。此晩食は臨時に他人の家の二階座敷を借りてなさつたのでありますから、其室におはいりになりました時に手足を洗ふ爲めに水をかけてあげる僕も給仕人も居りませんでした。そんなら各自が自分で洗つたらよさそうなものですが、ユダヤの風俗では日本の樣に盥の中に手足を入れて洗ふのではなく他人から手と足に一緒に水瓶の水を懸けてもらつて洗ふのでありますから、誰れかゞ一人僕の役目をしなければならんのであります。ところがイエス樣のお弟子達はまだ傲慢の氣が

取れませんので、互に自分が一番偉い御弟子であると考へて、此晩の食事にも自分が第一の首座に坐りたいものだなどゝ考へてをりましたから、他人の爲めに僕の代りを勤めるなどゝいふ謙だつた考は毛頭心に浮びませんでした。イエス樣は弟子達の此傲慢の心を御覽になり、大層御悲しみになりまして如何にかして謙遜と云ふ事を敎へねばならんと御決心なさつたので有ます。併し口で何程敎へても直ぐ忘れてしまふのを氣づかはれましたから、イエス樣はすぐ上衣をお脱ぎになり手拭を腰にはさみ盥に水をいれて弟子の足を一人々々お濯ひになり、そして其腰にまとふた手拭で一人々々お拭きはじめになりました。諸君弟子達はどのやうに喫驚いたしたでありませう。又どれほどか恥かしく思つたでありませう。ペテロと云ふ御弟子は餘り勿體ないと思つて、たつてお斷はりを申上げましたけれどもイエス樣はどうしても御承知なさらないで矢張其足をも御洗ひになりました。皆な洗ひ終つてから上衣をきて席にお就きになつてそれからそろ〳〵弟子達に向つて謙遜といふ事と、人の爲めには賤しい仕事で

もなんでもするのが一番偉い人であると云ふ愛の貴い教をなさいましたのであります。諸君、イエス様は私共の救主で人間の中で一番えらい御方であるのに、其弟子の足を洗ふと云ふやうな尤も賤しい仕事をもなさいまして、私共の爲めに謙つて人の爲めに盡す愛の行ひの御手本を見せて下さつたのであります。主イエス様でも此の通りでありますから、私共は互ひにお友達やお家の人の爲めに骨を惜しまずに喜んで善い事をいたしまして、本當のイエス様の御弟子となりたい者であります。此金言は此時のイエス様の御言葉であります。

『我爾曹に例を示せり、こは我なんぢらに行す如く爾曹にも行さしめんが爲めなり』。

第四十六課

〔課題〕　死後の賞罰。

〔教材〕　馬太傳二十五章三十一節より四十六節迄。

〔朗讀〕　馬太傳二十五の三四—四〇。

〔金言〕　爾等わが此兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり（太二五の四）

〔引照〕　太一九の二七—三〇。羅二の一—一一。一四の一〇—一二。希九の二七。約壹四の一七。默二〇の一一—一二。

〔教訓〕　神は全智全能にして在さゝる所なく常に我等を照覽し給へば、如何なる小善小惡と雖も必ず之を御心に留め給ひて、啻に此世に於てのみならず我等の死後と雖も一々之によりて賞罰を行ひ給ふことを深く兒童の心に銘せしむるを以て此學課の目的とす。

【教話】　諸君、私共が善い事を行ひますのは何の爲めでありますか。善い事は行ふべきものであるから行ふので、何にも別段に神様から御褒美をいたゞく爲めではありません。褒美を戴かうと思つて善事を行ふのは何も偉い事ではありません。けれども天の神は知らざる所なく在さゞる所なく私共の爲ること成すこと一々皆な御存知でありますから、善事は自然に善い報ひを受け惡事は自然に罰せられることになるのであります。此義しい賞罰は人間が此世に生きてをる間ばかりでなく、私共が死んでから後までつゞくものでありまして、此世で善事をした人は死んでから天國に行き、神様と何時までも一緒に居ることが出來ます。之に反して此世で惡事をした人は死んでから地獄に落ちて、何時までも苦しい目をして終には亡びてしまふのであります。聖書には人が死んで神様の前に出る時の事を世の終の審判と申してあります。其時天の父なる神様は恰度王様が家來の賞罰をなさる時のやうに中央の位に坐つて其右の方に居る多くの人々に向つて斯様に云れませう『汝はわが飢へて居る時に之に食物を與へ、

渴てをる時に飲料を與へ、寒い時に衣服を與へ、病める時に見舞ふて呉れ、獄にいれられた時に來て慰めて呉れたのであるから、汝は天國の民となつて何時までも我と共に居れ』と仰せられませう。それから今度は左の方に居る多くの人々に向て斯様に申されます『汝はわが饑え渴いた時に知らぬ顏をして居た。わが病氣になつたり獄に入られたりした時に、我を見舞ふても呉れなかつた。斯様な薄情者は其罰として地獄に落ちて滅んでしまへ』と申されます。そこで善人共は喫驚して『主よ私は何時あなたに食物をさし上げあなたの病氣を見舞ふたり致しましたか、一向覺えがありません』と申しませう。すると王は今日の金言通りの御言葉を以て答へ給ひませう。即ち人間の中の最も賤しい小さな兄弟の一人に善事をしたのは即ち自分に向つてしたと同じことであると云はれるのであります。又惡人が其兄弟たる人間に不親切であるのは即ち神に對して不親切であるのである。人間の中で一番微小な人即ち幼兒に冷い水一杯でも飲ませてやるのは取りも直さず王の王たる神様に向つて冷い水一杯を差上げたので

あります。それだから私共が此世で爲す一言一行は殘らず天の父樣に記憶されてあつて天の父樣は一々之に依つて賞罰をしたまふのであります。（敎師は謠曲『鉢の木』の佐野源左衛門常世が時賴と知らずして旅僧に親切を盡して後ち鎌倉に於て大に賞せられし逸話、及び乞食と思ふて施與をせしに忽ち其乞食が變貌して主の姿を現ぜしと云ふ中世記の物語などを附け加へて、知らずしてなす小善の一々神に賞せらるゝことを說明するも可ならん）。

（注意）　天國地獄の光景は妄りに想像を以て物質的に形容すべからず、只天國は神と俱に居る處地獄は神より離れたる處と敎ふべし。

第四十七課

〔課題〕　愚かなる富める者。

〔敎材〕　路加傳十二章十三節より廿一節迄。及び路加傳十六章十九節より三十一節迄。

〔朗讀〕　路加傳十二章十六節より二十一節迄。

〔金言〕　若し人全世界を得るとも其生命を失はゞ何の益あらんや（馬太傳十六章廿六節）。

〔引照〕　提前六の七—一一。太六の一九—二一。一九の二三—二六。

〔敎訓〕　神を知らざる人々は此世の財產を最も貴き物と考へ、唯だ富みさへすれば幸福なりと思へども、眞の幸福は神の前に義しき者となるに在れば、財產を恃みて神を信ぜざる者の如何に愚かなる者なるかを知らしむるを以て此學課の目的とす。

〔教話〕　或時財産上の爭ひから只弟喧嘩をしてゐる者がありまして、其の中の一人がイエス様の處にやつて來て、どうぞ兄弟が自分に財産を分けるやうに命じて下さいと御願ひ致しました。財産の事で兄弟喧嘩をするばかりでなくイエス様の御威光で財産を自分の物にしやうと考へるなどは隨分の貪慾者であります。そこでイエス様は次のやうな面白い喩話をなさいまして、此世の財産よりも天に財寶を積むべきであると云ふ貴とい教へをなさいました。愚かな富者の比喩とは即ち是れであります。

或金持の百姓がありました。秋になつて此節の樣に田畑が見渡すかぎり黃金色に實のりまして、澤山の收穫がある見込でありますから、百姓はホクホク喜んで獨りで心の中で思ふには、かういふ豐作では今迄での倉ではとても穀物がはいり切らないに違ひない。よし〳〵今の倉を毀して更に大きな立派な倉を建て其中に今年の收穫物と是迄で貯蓄しておいた多くの財寶を藏めることにしやうと、かう思つて、夫れから自分の靈魂（靈魂とは吾等の肉體に宿れる精神に

して死後にも限りなく生存する者なりと云ふ簡單明白なる說明を與ふべし）に向つて、靈魂よ、安心し給へ、永々御苦勞をかけたけれども愈よ財產も澤山出來て、此先幾年でも安樂に暮すほどの準備ができたから、安心して飲んだり食つたりして樂しんで呉れ給へと、かやうに自分で自分の靈魂に申してゐました。

ところが何んと憐れではありませんか、此の富める者は納屋も倉も出來上つて是れから愈よ安樂といふ段になつて、コロリと其晩の中に死んでしまつて其靈魂は神の前に召し出されることになりました。人間は生身の肉體をもつて居りますから何時なんぢき神樣に召されて此世を去らねばならぬか知れません。其時は何程澤山の財產があつても鐚一文も持つて行くことは出來ません、さうなつてから何程周章狼狽しても駄目であります。人全世界を得るとも其生命を失はば何の益あらんやとは此事であります。

之れと恰度同じ種類の今一つの比喩も、イエス樣が富める不信仰者の不幸と貧しき信仰家の幸福とを比べ合せて一つの比喩談をせられたのであります。即ち

第四十七課　愚かなる富める者

富める人とラザロの話であります。或處に偉い富豪があつて夜晝奢り樂んでをりました。又ラザロと云ふ貧民がありまして、此富者の食卓から落ちる餘りのパン屑を拾つて漸やくの事で饑を凌ぐ程の憐れな乞食同樣の人間でありました。併し富豪は此世の樂みに耽つてゐますから少しも神樣を信仰せず、又何の善い事も致しませんで、只だ自分の榮耀榮華を極めて居ります。之にひきかへて、ラザロは貧乏で此世の樂みがないからして、一生懸命神樣の事を信じて出來る丈けの善事をつくして居りました。所が二人とも死にましてラザロは天國に往き富者は陰府に落ちて苦んで居ります（以上路加傳十六章の物語を殆んど聖書の儘に平易に面白く物語るべし。富者の不幸慘狀とラザロの幸福榮光とを能く相對照して興味深く物語り、以て神を知らざる富者の運命の如何に憐むべきかを高調すべし）。

第四十八課

〔課題〕高ぶる者は卑くせらる。

〔教材〕路加傳十四章七節より十一節まで及び同十八章九節より十四節まで。

〔朗讀〕路加傳十四章七節より十一節迄。

〔金言〕凡そ自らを高うする者は卑くせられ自らを卑くする者は高くせられん（馬太二十三章十二節）。

〔引照〕太二三の一—一二。路一八の一五—一七。箴二五の五—七。彼前五の三—六。

〔教訓〕少年少女の最大の誘惑は人の前に自ら高くせられんとする虛榮心なり。他の生徒又は朋友よりも自分一人丈けが特別に取扱はれんことを望むは彼等の常なり。多少の競爭心は必要なれども虛榮に流れ傲慢に陷らざる樣幼時より謙讓の美德を奬勵するを以て此學課の目的とす。

〔教話〕　諸君、何が見つともないと云つても、人の前に自分丈けえらさうにして、無闇に威張り散らして人を輕蔑するやうな振舞ひをする人ほど、見苦るしい者はありません。イエス様が一番おきらひになつた人間はどういふ種類の人であるかと云ふと、第一は僞善者と申しまして惡心を持つてゐながら善人の眞似をして人の目をくらまさうとする者と、第二は自分がつまらない人間でありながら人の前に威張り高ぶる人間でありました。それでイエス様は其頃の學者やパリサイ人と云ふ傲慢な人々に向つて、汝等もし謙つて嬰兒の如くならなければ天國に入ることは出來ないと仰せられました。嬰兒と云ふものは高ぶることを知らないものであります。私共は何程年を取つて大きくなつても何時でも天の神様の前に無邪氣な嬰兒のやうにへりくだつて居らねばなりません。さうするならば神様は私共を愛し給ふて低い所から高い所に上げ給ふでありませう。さう云ふ人は謙遜すればするほど却つて高くあがめられる者であります。イエス様の御比喩のうちにかういふお話があります。或二人の者が同時に

神の殿にのぼつて祈りを致しましたが、其一人はパリサイ人で一人は稅吏と云ふ賤しい職業をしてゐる人でありました。パリサイ人は眞直ぐに立ちあがつて大聲でかやうに祈りました。神よ我は他の人の如くいろいろな罪を犯しもせず、又この稅吏のやうな賤しい人間でもない事を有りがたく御禮申上げます。其時稅吏は遙か會堂の下の方に立つて、天をも仰ぎ見ず自分の胸に兩手をあてゝ悲しげに、神よ罪人なる我を憐み給へと祈りました。此二人のうちどちらが神様に義しい者とせられて家に歸りましたか（生徒をして答へしめ、且つ其理由を語らしむべし）。其通りです、何でも自分を偉さうにして高ぶる者は却つて卑くせられて、自分をつまらない者だと思つて卑くする者は却つて高くせられる者であります。イエス様は又宴會にいつた時の心得に譬へてかやうにお教へになりました。汝等宴會に招かれた時自分から進んで上座に坐つてはならぬ。若しも自分よりも貴とい人が後から來たならば家の主人が汝等に向つて、御氣の毒ですが其席を讓つて此御方に坐らせて下さい、あなたはもつと下座に行つて下

第四十八課　高ぶる者は卑くせらる

さいと云ふであらう。さういはれて下座にやられるほど恥かしい事はあるまい。それに反して自分は謙遜して下座に坐つてをるのを家の主人が見付けて、あなたは此處では困りますマア〳〵何卒あちらにお進み下さいと強いて上座に進められたならば、汝等の名譽は如何ばかりであらう。何事によらず此通りで自分で謙つて居ると却て人があがめる樣になるものであるとお敎へになりました。日本の發句に『下がるほど譽れは高し藤の花』と云ふ句があります。藤の花は低くたれるほど良い花だと人は譽めるのであります。孔雀の羽根を拾つて自分の身にかざつて威張らうとして、化の皮が現はれた馬鹿な烏のお伽噺を知つてをりませう。空威張りは世の中で一番見つともないものですから、諸君は能く今日の日課を忘れない樣にして下さい。

第四十九課

【課題】人の罪を免さぬ惡人。

【敎材】馬太傳十八章二十一節より三十五節迄。

【朗讀】馬太傳十八章二十三節より三十節迄。

【金言】我儕に負債ある者を我儕がゆるす如く我儕の負債をも免したまへ（太六の十二）。

【引照】太六の一四—一五。路一七の三—四。弗四の三一—三二。雅二の一三。

【敎訓】神は我等の天父にして人は同胞兄弟なれば他人の過ちを咎めず、其罪を免すは、神の子たる基督信者の第一の資格なることを知らしめ、人を免すにあらざれば自らも神に免されざるの道理を合點せしむるを以て此學課の目的とす。

【敎話】イエス樣の御弟子達の中でペテロと云ふ御方は一番偉い御弟子でした

けれども、自分が義しい人だけあつて惡い事をした人に向つて隨分短氣な人でありました。或時此ペテロが何か癪にさわる事を他の弟子にせられたのを、ぢつと耐えて怒りを抑へる事が出來ましたので、自分でも餘程善い事をしたと思ひ、少々得意の顏付でイエス樣の許にやつて來て、先生私共に罪を犯した兄弟がある時は大抵幾たび位其人の罪を赦してやつたら宜しいでせうか、七たび位も赦してやつたら宜しうムいませうか如何ですかとお問ね申上げました。その時イエス樣はペテロに向つて『われ汝に七次とは言はじ七次を七十倍せよ』と仰せられました。諸君七次を七十倍すれば何度になりますか。(生徒をして答へしむ)。左樣七七四十九で四百九十度となります。四百九十度も同じ人の罪を赦すと云ふのですから、實は何度でも限りなく罪を赦せよと云ふイエス樣の御敎訓であります。勿論此敎は人が惡事をするのを搆まはずに放任つて置けと云ふのではありません。私共は人が惡事を行ふた時は充分之を諫めて止めさせる樣にせねばなりません。どうしても止めない時は無理に止めさせることも必要で

あります。場合によつては世の中の法律の力で惡事を防ぐのも宜しい事であります。併し一旦其人が罪を悔いて謝罪を致しましたら、私共は其人の前の罪を全く赦してやつて、眞正の兄弟のやうに交はることが何より大切であります。若し諸君の御友達が何か惡い事をしても一旦惡るかつたと氣がついて謝まりましたら、其時からすつかり赦してあげねばなりません。(生徒をして各自此經驗ありやなしやを反省せしめよ)。ずつと以前の學課で學びましたヨセフの御話は諸君よく記憶て居りませう。ヨセフの一番偉い人である理由は自分に大罪を犯した兄弟達を全く免してやつた所にあるのであります。

偖てイエス樣は此の通りに限りなく人の罪を赦すとの敎へをなさいまして、それから今度は弟子達に向つて一つの面白い比喩話をなさいました。此お話は私共がもし他人の罪を赦して上げなければ、神樣に私共の罪を赦して頂くことが出來ないと云ふ事を敎へるものであります。或王樣が臣下共と會計の調査をしました時、王樣に千萬圓の借金をして居る者を王樣の前に曳き出して參り

ましたが、どうしても其借財を返す方法がありませんので、其人も妻子までも今少しの事で奴隷に賣られるところでありました。併し色々御願ひを致しましたので、王樣も可哀相に思ひ、ヤットの事で其借財を免してもらひましたが、歸り途に彼は自分に僅か百圓ほどの借金をしてをる友に遭ひまして之を引き執へて喉をしめつけ、サア〳〵借金を返せと迫りました。其友は一生懸命に歎願しましたが聞き入れないで到頭訟へて獄屋につなぎました。王は此無慈悲の行ひを聽いて非常に怒り此惡しき家來を呼び出して大層叱り付け、且つ之を終身懲役にしてひどく罰しました。諸君王樣はさきに此人を免しておき乍ら、何故こんなにひどく罰したのでありませうか其理由を答へて下さい。

（此比喩は餘程演劇的にて話しやうによれば非常に面白くなるべし）

第五十課

【課題】　葡萄園の働人。

【教材】　馬太傳第二十章一節より十六節まで。

【朗讀】　馬太傳第二十章一節より八節まで。

【金言】　人に事ふる如くせず主に事ふるが如く甘心つかふべし（以弗所書六の七）。

【引照】　路一七の七—一〇。羅九の一四—二三。弗六の五—八。

【教訓】　賞められん爲めに、或は褒美を受けんが爲めに善事をなすは世の兒童の常なれども、小さき基督者はしかすべからず、善を行ふは己が爲すべき分なるが故に之を爲すなりと云ふ、高尚なる道德性を養成せしむるを以て此學課の目的とす。

【教話】　ユダヤの國には葡萄園が澤山ありまして葡萄を作るのが農家の第一の

仕事でした。丁度日本で養蠶の時のやうに、ユダヤの國でも葡萄園の主人は臨時に働き人を備ひ入れることがあります。でイエス様は或時かういふ比喩談をなさいました。

或朝早く葡萄園の主人が起き出でゝ、自分の葡萄園で働く人を大勢備ひ入れました。一日の賃錢は銀一枚と極めたのであります。是はその頃の勞働者の普通の賃錢でありますから、多勢の人はその園に傭はれました。けれどもまだ働き人が足りませんので、主人は九時頃に再び街にいつて、職業が無くつてぼんやり街巷に立つてゐる立ン坊のやうな人々を呼び集めて、お前達も早速私の葡萄園にゆけ、相當の賃錢をやらうと申しましたので立ン坊等は喜んで皆な此人の園に參りました。これでもまだ働人が足りないので、主人は正午十二時と午後三時と午後五時頃と今三度出懸けていつて又々澤山の人を連れて參りました。(さうすると初めから此主人は何度働き人を雇ひましたか。又午前六時より午後六時迄働かせるとして、最も多く働ける者は何時間、尤も少なく働ける者

は何時間勞働しましたか)日暮れる頃主人は番頭にいひ付けて凡ての働き人に約束通り銀一枚づゝを與へさせました。一番遲く午後五時頃から傭はれて一寸しか仕事をしない人々が銀一枚の賃錢を貰ふのを見て、朝早くから傭はれた人々が心の中に思ふには、これは甘いぞ、僅か一時間しか働かなかつた人でも銀一枚の賃錢を貰つたのだから、自分等早朝より日中にかけて今まで働いたものは、大抵銀五枚づゝ位は貰へることだらう、さうしたら酒の一升も買つていつて都合によつては明日は一日家の中に寢ころんでゐやうなどゝ考へて、ほくほく喜んで番頭の前に出でました。が案に相違で番頭は矢張り銀一枚づゝしか呉れませんでした。そこで此人々は大層不平を起しまして主人を怨んで申しますには、之は全體不都合な仕業である、一時間ほどしか働かない者と十二時間も働いた者とを同じ取扱ひをするとは怪しからんと云つて大に罵りました。すると主人は其中の一人に向つて次の樣に申されました。お前の不平は少しも道理が無い。第一私はお前に向つて約束を破つたか。破らない。現に約束の銀一

枚を拂つたではないか、お前は當り前の利益を得たのであるからそれで滿足するがよい。何も他人の受けた賃錢を見て彼是れ云ふべきでない。私が自分の物を自分の思ふやうにするのであるから、何もお前が世話をやいて呉れんでもよい。私が他人に澤山のものを與へたから夫れ丈けお前は貧乏になつた譯ではない。丁度他人が强壯になつたからそれ丈けお前が病身になる譯はないのと同じ道理だ。自分で約束通り相當の賃錢を受けさへすれば、何も他人を羨やんで不平を云ふに當らないではないか。お前達は一體餘り慾が深い。御褒美を受ける爲めにばかり働くのだ、それだから多く貰つた人を見て無闇に羨ましく思ふのだ。人を妒んだりそねんだりするのは皆な餘り貪慾だからである。自分が銀一枚で働く約束をした以上は、其働きをするのがお前達の爲すべき義務だらう。其義務を盡す爲めに終日働いたとて何も別段に恩を着せる必要はない。當然の事をしたばかりの事である。それだから感謝して其當然の價を受くるがよい、他人の事を羨やむほど穢い根性はないのである。斯やうにイエス樣は葡萄園の比喩

をお語りになりました。私共は此世の中で善い働きをするのは御褒美を貰ひたい爲めではなく、只だ私共が神樣のみこゝろに適ふ事をして自分の爲すべき義務を盡す爲であります。さう思へば何時も嬉しく、感謝して働くことが出來ます。人を見て羨んだり報酬が少ないとて不平を云つたりすることが無いやうになります。

第五十一課

〔課題〕　復習。

〔教材〕　第四十課より第五十一課に至る十二學課に於て學びたるイエスの十二比喩。

〔朗讀〕　馬太傳第十三章十節より十七節まで。

〔金言〕　左に十二課の金言及び題意を再錄す。教師は一金言づゝ先づ自ら唱へ後ち生徒一同をして之に和せしむべし。

○汝等道を行ふ者となるべし徒之を聞くのみにして自己を欺く者となる勿れ（種播の比喩）

○爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛すべし亦己の如く隣を愛すべし（善きサマリヤ人の比喩）

○一人の罪ある人悔改めなば悔改むるに及ばざる九十九の義人よりも尙ほ天

に於て喜びあらん（放蕩息子の比喩）

○善且つ忠なる僕よ爾僅かなる事に忠なり我爾に多きものを督らせん（主人の金を預りし僕等の比喩）

○是故に凡て我此言を聽きて行ふ者を磐の上に家を建てたる智き人に譬へん。雨ふり大水出で風ふきて其家を撞てども倒ふるゝことなし是れ磐を基礎としたればなり。凡て此言を聽きて行はざる者を砂の上に家を建てたる愚かなる人に譬へん。雨ふり大水いで風吹きて其家を撞てば終には倒れてその傾覆大いなり（二種の礎の比喩）

○われ怠らずして守れと爾曹に告ぐるは即ち凡ての人に告ぐるなり（賢き童女と愚なる童女の比喩）

○我なんぢらに例を示せり、こは我なんぢらに行し如くなんぢらにも行しめん爲なり（イエス弟子の足を洗ひ給ふ實行の比喩）

○爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行へるは即ち我に行ひしなり（死後の賞

制に關する實例の比喩)

○若し人全世界を得るとも其生命を失はゞ何の益あらんや(愚なる富者の比喩、及び富者とラザロの比喩)

○凡そ自らを高うする者は卑くせられ自らを卑くする者は高くせらる(パリサイ人と稅吏の比喩及び宴會の席順の比喩)

○我儕に負債ある者を我儕が免す如く我儕の負債をも免し給へ(殘酷なる負債者の比喩)

○人に事ふるが如くせず主に事ふるが如く甘心つかふべし(葡萄園の傭人の比喩)

〔問答〕　敎師は生徒が如何によく以上の金言と其比喩の敎話とを記憶の中に結合し居るやを試驗せんが爲めに、自ら或金言を朗讀し、其金言はイエスの如何なる比喩に適するやを、生徒をして答へしむべし。又其反對にイエスの比喩の題目を與へて之に適する金言を諳誦せしむべし。

又左の數問に答へしめよ。

(一)何故にイエスは斯く屢々比喩を以て人々に敎へ給ひしや。(解し易く眞理を敎へん爲め也)

(二)イエスの比喩とイソップ物語やお伽噺など異なれる所は何ぞ。(比喩は凡て此世に有り得べき事柄にして、物語は自然界に有り得べからざる作り話なり)

(三)是迄で學びしイエスの比喩のうち各自の最も好む所の比喩話は何ぞ。(生徒をして思ひ〳〵に答へしめよ、必ずしも其好む理由を問ふを要せず)

(四)以下の諸比喩の中にある善惡、賢愚、幸不幸等凡て正反對なる二個性質を指摘せしめよ。例へばパリサイ人と稅吏の比喩に於ては稅吏は善にてパリサイ人は惡、富者とラザロの比喩に於てはラザロは幸にして富者は不幸なりと云ふが如し。

(1)善きサマリヤ人の比喩(2)金を預りし僕の比喩(3)二種の礎の比喩(4)二人の童

第五十一課　復習

女(5)富者とラザロの比喩(6)パリサイ人と稅吏の比喩。

日曜學校少年少女科教案　下卷終

明治四十四年五月廿七日印刷
明治四十四年五月卅日發行

（定價　金二十錢）

著者　加藤直士

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　神奈川縣市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　神奈川縣市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店
（振替東京五五三　電話新橋一五八七）

大賣捌所　東京市本郷區春木町二丁目廿三番地　警醒社支店

不許複製

同志社長原田助序
神戸頌榮幼稚園長ハウ譯

フレエベル氏人之教育

フレエベル肖像入
フレエベル夫人書簡

クロス上製菊判　定價金壹圓五拾錢　郵稅拾弐錢

仝　女史譯　ラモラウ原著

開發的生活

四六判　定價　クロス　金六拾五錢
並製　金五拾錢　郵稅ナシ

近世に於ける教育學の革命者はフレエベルなり、フレエベルの唱へたるは開發的教育なり。ハウ女史は夙にフレエベルに私淑し、其開發主義を以て躬ら育英の任に當らるゝの人、此の二書の普通の譯書に非ざるや知るべし。教育に從事するもの、就中宗教々育に意ある者は先づ此二書を繙かざるべからず。

田村直臣著

廿世紀日曜學校

クロス上製
定價金七拾錢
郵稅六錢

田村先生は日本に於ける模範的日曜學校と稱せらるゝ、數寄屋橋教會の日曜學校の校長なり。兒童心理學上の豐富なる智識と、多年の自家の經驗とを併せて、本書を著さる。日曜學校の管理者教師は勿論、子女に宗教々育を施さんとする人の必讀書。

ジユボイス原著　大宮季貞、鈴木浩二合譯

教授の秘訣

四六判
定價金參拾錢
郵稅四錢

小兒に宗教々育を施すの困難は日曜學校教師及父兄の共に感ぜらるゝ處也。本書は其の精神及方法を詳にし、有力なる教授者の助力者たらむとす。

藤川淡水著

バイブル御伽噺

四六判（表裝美麗）
定價金五拾錢
郵稅六錢

本書は五十の御伽噺を聖書の教訓の精神に基きて作りたるもの、其物語の人物は凡て小兒にして、小兒をして同情同感を起さしむるに適す。且各物語の終りには聖句を以て之を結び、恰もイソプ物語の格言の如くになせり。本書は出版以來頗好評にして、既に再版を賣盡さんとす。

大宮季貞編

犬の話

表紙美麗
定價金貳拾錢
郵稅二錢

西洋に行はるゝ犬に關する話を蒐集し、之を我が小兒に與へて其德性を養成するの料となし、併せて動物哀憐の習慣を作らしめんとす。勇敢なる、忠義なる、怜悧なる、十八個の犬の話。

新島善直編

クリスマス物語

定價金四拾錢
郵稅六錢

クリスマスに際して、お話、對話、諳誦の材料の少き事は、日曜學校教師の常に嘆ずる處なり。本書は著者が八年間北海道の札幌教會に於て毎年試演せられたるを蒐集したるもの、其のステヱヂに適するものたるや論なし。

毛利薫譯

柊山のクリスマス

定價金貳拾錢
郵稅四錢

米國南北戰爭の間に、南軍一將校の家庭に起りたる可憐なる小話なり。小兒をして讀ましむるも可、之に聞かするも可、兎も角新しき味を與ふる御伽噺なり。

ブラウン編

日曜學校用唱歌

ゆきびら

湯谷磋一郎作歌

譜無シ 金拾錢
譜付 金五拾錢
郵税八錢

日曜唱歌

定價 金拾貳錢
郵税 貳錢

各派合同

讃美歌

第一編
第二編

各種

一手販賣

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
東京市本郷區春木町二丁目廿三番地

警醒社書店
（振替東京五五三 電話新橋一五八七）
警醒社支店

米國オベリン大學總長 キング博士著
加藤直士先生譯

イエスの倫理

前卷
後卷
合本
全一冊

定價 金壹圓 送料八錢

イエスの教訓に對する歐洲諸權據の研究に基き、最も科學的なる研究的態度を以て、分析詳解す……前卷

分析解剖したる後に、專ら教度なる心露的修養的立脚地よりイエスの倫理を綜合し縷説す……後卷

トルストイと加藤直士先生と

トルストイの人生觀

定價 金五拾錢　郵税六　錢

譯者が杜翁の名著『人生』を熟讀玩味して、之を換骨脱胎し、平易明庸なる言語を以て大思想を傳へんとしたるもの、若し夫れ卷尾附する處の『基督教の神髄』は杜翁が人生觀の基礎を窺はしむるものなりとす。

『基督教の神髄』は別冊として　定價二十錢　郵税四　錢　にて發賣す。

加藤直士先生著譯

最近贖罪論

佛國の神學者、サバチエーが名著を和げられたるもの。

定價八錢　郵税四錢

二問三駁

渡瀨常吉、小山東助二氏と共に加藤博士を駁したるもの。

定價十七錢　郵税四錢

戀愛の福音

定價十二錢　郵税四錢

眞勇

マンリチス、オヴ、クライストの譯なり。

定價十八錢　郵税四錢

264
1001

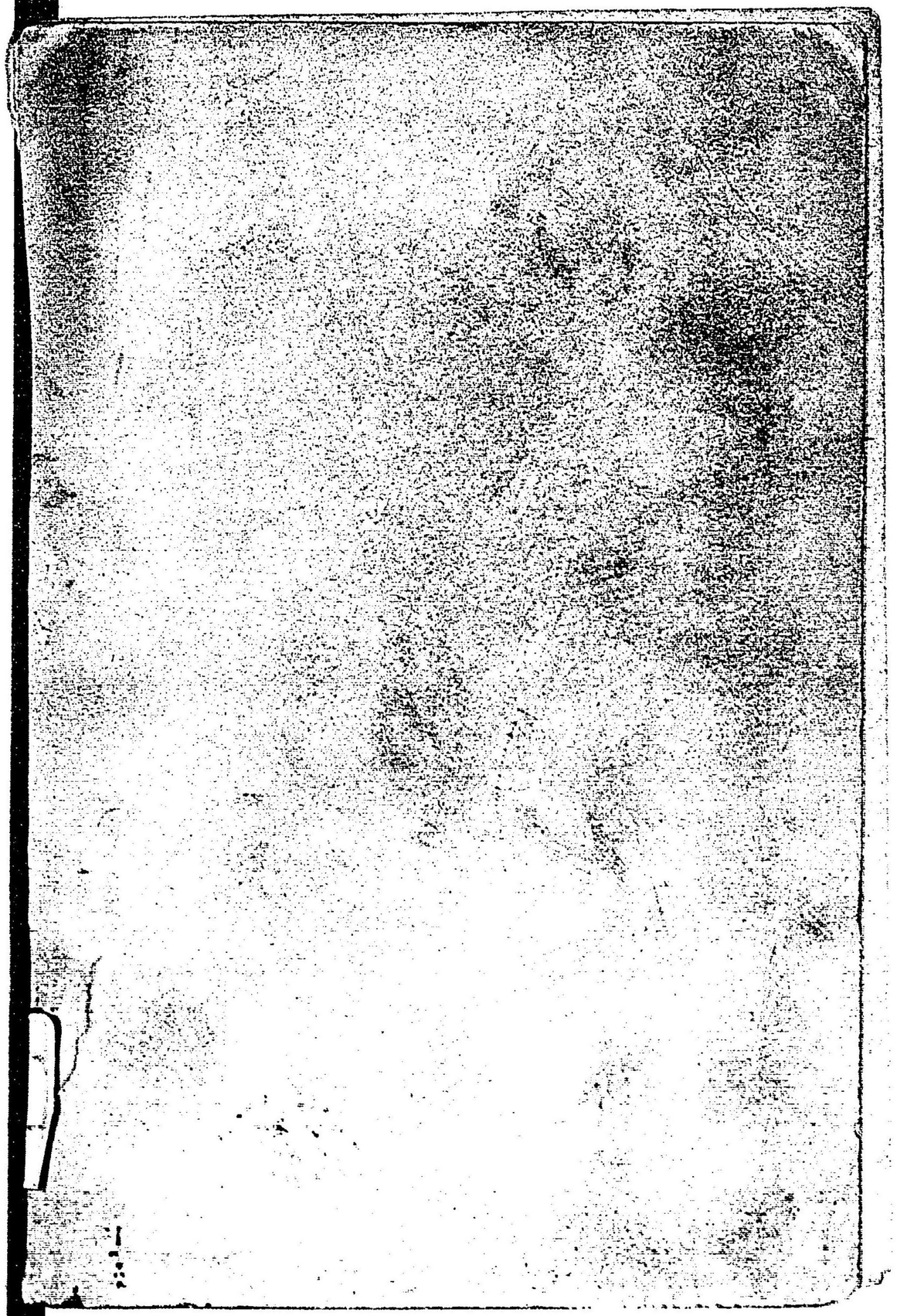
日本日曜學校協會々頭　小崎弘道君序
日本メソヂスト教會日曜學校總務局幹事　三戸吉太郎君序
基督教世界主幹　加藤直士君編

（上卷）

少年
少女科

日曜學校教案

（自一月至六月前半期分二十六課）

定價　貳拾錢
郵税　四錢

こは萬國日曜學校協會公認の最新式級別教科書を基礎とし、之を出來得る丈け日本化して毎課に日本の兒童に適する教話を附したる教師用の新案教科書なり。從來の教科書に滿足する教師も之を好個の參考書とせらるべく、從來の教科書に滿足せざる教師は之によりて年來の希望を達せられ、教授上最大の便益を得らるべし。此教案を使用せられなば何人も良教師たるを得べしと信ず。全國の日曜學校來年第一日曜より擧つて採用せられんことを望む。